

ウィングス小説大賞四次通過

『LADY BE GOOD』

原稿用紙換算150枚

(名前非公開) 著

「Sophisticated Lady」

その街はいつだって霧に閉ざされていた。

その街には光が届かなかった。その街には夜しかなかった。夜の訪れとともに、その街は目覚める。そうして霞がかつた風と共に、何かが音も立てず夜の闇に消えていく。

暗黒街。光の中に住む人々はその街、バノム街をそう呼ぶ。そしてその闇と霧の街の真中に、店はあった。

眠らない繁華街から少し外れた裏通り。周りを高いアパートメントに囲まれた、街の谷間とでもいえそうな石畳の四辻。その角の一つに、古ぼけたその店が身を縮めるように納まっていた。

霧の中に佇む、石造りの強固な、しかしごんまりとした建物。日が落ちて間もない街の闇の中に、分厚い木の煤けた扉を、造りつけられた電火ランプが照らし、儂く光る蛍のように浮かび上がっていた。扉の上に掛けられた真鍮の看板には、丁寧に飾られた「魔薬紳士の店」という字と、薬ビンをかたどったレリーフが掘り込まれている。扉の両脇の、石の壁に穿たれた窓からは、灯りがこぼれて石畳に四角い光を投影していた。

そしてその窓から、静かな話し声が零れてきた。

「...では、これを飲めば怪我をしても血を流さずにすむって言うんだな？」

窓の向こう、部屋の中、奥のカウンターの前にいる男がそう言った。暗い青のコートを着こみ、帽子を目深にかぶった若い男だった。背は高く、白い顔が帽子から覗いていた。そして帽子の影から鳶色の瞳がカウンターの向こうに向けられた。

カウンターの向こうにも女が一人、いた。

この店の主であろう。短く、ふわりとした赤みがかった銀髪。その下にある切れ長の、憂いを含むブルーグレーの

瞳が男を見据えていた。薄く、力を入れれば割れてしまいそうなほど華奢な体を、黒い薄手のジャケットで包み、その脚にもまたすらりとした黒いパンツを揃えていた。そして薄闇に浮かび上がる透き通るような白い顔。まるで白い陶器のような硬く冷たい顔。その顔が静かに、頷いた。

「ええ。この薬を使えばあなたが怪我をしても、少なくとも12時間は血は零れませぬ。普通なら命に関わるような怪我をしても、生きてさえいれば、動く事ができるのです」

少しかすれた、しかしよく通る澄んだ声が、石造りの店内に聞こえた。7m四方ほどの店内には、金属で出来た背の高い棚がいくつか作りつけられ、その一つ一つに整然と様々な薬のビンが並べられていた。

はつきりと言いつ切る主に、その客は溜息混じりの声をあげた。

「カタリナさん、だったっけ？ 凄いな。あんたの作る薬は」

カタリナと呼ばれた女は、男の言葉に少しだけ嬉しそうに答えた。

「私の魔法の結晶ですから」

そして緩めた頬を引き締めて、続けた。

「けれど、覚えておいてください。どんな魔法も失ってしまったものを完全に取り戻すことはできない。命もまたその一つです。それを、どうか」

カタリナの、そんな言葉を聞いて、しかし男は低く笑って言った。

「わかってるさ。命を失いたくないから、あんたみたいな薬屋を探していたんだ」

その言葉を聞いて、カタリナは重々しく、しかし少しだけ満足そうに頷き、言った。

「精霊の加護を」

「そりやどっかな」

そう答えて男は薬を受け取り、カウンターに幾ばくかの金を置いて、そして緩やかに振り返り、古ぼけた木のドアを開けて出て行った。カタリナの方を振り返りはしなかった。

ドアが閉まる金属の音が消え、そうして店はまた静寂に閉ざされた。

「止めねえのか」

出し抜けに、店の隅から男の低い声が聞こえた。色とり

どりの薬瓶が整然と並べられた棚の影からだった。カタリナがそちらを振り返ると、暗がりには背の高い男が立っていた。

上着の上からでもわかる引き締まった体、短く刈り込んだ灰色がかった金髪。首筋と目の上に傷跡がある、その浅黒い顔は今少しだけしかめられていた。

カタリナが何も言わないでいると、暗がりの中の口が動いた。

「他人つつつても、買ってった薬がアレじゃどう転んでも穏やかじゃねえ、そうだろ？」

「いつからいた、克蘭ク」

カタリナは、克蘭クと呼ばれたその男の言葉には答えず、ぞんざいな口調でそれだけ聞いた。彼はゆっくりと足音も立てずに近づいてきて、カウンターに両手を突いて言った。

「お前が薬を取りにカウンターの奥に引っ込んだ時からさ。それよりあの男の顔見たろ？ありゃ何か覚悟決めたってな顔だぜ」

克蘭クの言葉に、カタリナはガラスの模型のような笑顔を浮かべた。

「だから私はお前が嫌いなんだ、克蘭ク」

カタリナは穏やかな眼で克蘭クを見て、そうぶつきらぼうに言った。そして懐から銀色の鈍く光るシガレットケースを取り出して、言葉を継いだ。

「わかって無い。この街には他人が分け入れない事情を抱えてくる人がごまんといるんだ。私にできる事はせいぜい薬を売る事ぐらいさ」

そう言ってカタリナは、シガレットケースから白い一本を取り出し、それにマツチで火をつけた。マツチから火が移った煙草の火口の部分が、青くじりじりと燃えた。そうしてその青い炎から生まれる、魔力のこもった青白い煙をカタリナは深く吸い込んだ。

緩やかに口から煙を吹いてそう付け足したカタリナに、克蘭クは「感傷を理解しない女だね」と呟くように言った。

「感傷？」

その言葉を聞いてカタリナは克蘭クにちらりと視線を投げかけた。

「下らないことを言う。現実には立ち向かおうとしている奴を止める力を持っているのは、感傷なんかじゃない。そいつ自身さ」

その目には欠片ほどの感傷の色も含まれていなかった。カタリナは煙草の灰をとん、と皿に落とし、少し穏やかな声で続けた。

「それにあの人の眼はすべき事を悟った人の眼だった。そんな目を持った人が、そう簡単に死なない事を私は知っているよ」

「だからか」

「だからさ」

カタリナのその答えに、克蘭クは感心したように頷くと、大げさに腕を広げた。

「おー、カタリナ。俺もその意見には賛成さ。大事なのは現実に立ち向かう事ってのはな。でもその現実を乗り越えるに一番必要なものが、いま俺には足りないのさ。それはなんだったかな？」

カタリナは何も答えなかったが、克蘭クは返事を確かめもせず、続けた。

「そう、金だ。今月色々物入りでな。財布の中身が領収書だけになっちまった。仕事するにもさ、商売道具も買えやしねえ。ちよつとばかり貸してくれ」

「だから私はお前が嫌いなんだ」

カタリナは呆れたように言つと、煙をゆつくりと吐き出した。魔法煙草独特の、透明で乾いた幽かな香りがした。

煙は散り散りになりながら天井に漂い、そこで大気に溶けて、朝靄の様に掻き消えた。

「Smile」

幾ばくかの金を手にした克蘭クが仕事に戻り、再び店にはカタリナ一人が残された。断続的にやってくる客たちを応対し、いくつかの薬を売るうちに、夜はとつぷりと更けてきた。客の足も途切れ途切れにな、一日の終わりが近づいてきた。

客足が途絶えてしばらくすると、静寂を保っていた店内に、軋んだドアと澄んだドアベルの音が響いた。カタリナは「いらっしゃいませ」を言おうとしたが、入ってきた二人の男の顔を見て、口は「い」の形で固まった。

「よう。相変わらず静かでいい店だな」

先に入ってきた大男が、緑色の鱗に覆われた手を壁につ

いて言った。いや、鱗に覆われているのは手だけではない。天を突くほど大きな身体は上等な黒のスーツに隠されていたが、服の無い所から覗く顔や足首もやはりてらてらと光る鱗に覆われ、その足元には尻尾も見えた。そしてその顔は人のものではなく、むしろ少しばかり利口そうになった爬虫類そのものといった様子だった。

それは『リザードマン』と呼ばれる種族の、一般的な顔立ちだった。

「何しに来た、ギノ」

カタリナはもとから冷ややかな顔から、殊更表情を追い出して、それだけ言った。

「何しに来た、か。相変わらずつれないな。まあ、今日は面倒をかけに来た訳じゃないんだ。ちょっと話をしにきたのさ」

「珍しいこともある。しかしこっちは話すことはない」
カタリナは持っていた魔法煙草を灰皿に静かに押し付けて、言った。その言葉を聞いて、後から入ってきた二回り小さいリザードマンがその黄色く光る目でカタリナを睨みつけた。

「おいクソアマ、兄貴に向かってその口の聞き方は何だ！」

やはりスーツを着こんだ、真っ黒な鱗のそのリザードマンがしゃがれた声でカタリナを罵った。カタリナはいつもと変わらない無表情でその視線を正面から撥ね付けた。それを見た黒いリザードマンは横に裂けた口から覗く牙を剥き、カタリナに詰め寄ろうとしたが、そこでギノと呼ばれた男に制された。

「まあ待てスピノザ、そういきり立つな」

スピノザと呼ばれた男はその一言で完全に鎮まり、一瞬の後大人しく引き下がった。

ギノはそのスピノザの様子に目もくれず、カタリナに向けてにやりと笑って言った。

「すまねえなあ、相変わらず血の気が多い奴だよ」

カタリナは何も答えなかった。ガラスの灰皿に残った青く燃える煙草が、音も無くゆっくりと消えていった。火が消えるのを見届けて、ギノは横に大きく裂けた口から牙を覗かせて、口を開いた。

「どうだ？お前の店にはいろんな客が流れてくるだろう？そこでお前にも頼んでおきたいんだがね」

カタリナが何も答えずにいると、ギノは勝手に続けた。

「最近カタリナ、この店には、『エルフ』なんて奴らは来たりしないか？」

「来ないな」

「エルフ」のところをことさら強調して言ったギノに、カタリナは即座にそれだけ答えた。ギノはその取り付く島もない口調にはお構い無しに、続けた。

「最近始めた新しい仕事でな、エルフの人手が欲しいんだ。これはれっきとしたビジネスさ。俺にそれを紹介してくれりや、然るべき報酬は払うぜ」

「それはいい話だな。だが期待には添えそうにない」

カタリナがにべも無く言うつと、ギノの後ろに控えていたスピノザが猛然と口を挟んだ。

「おうスベタ！いいかげんにしねえと」

「スピノザ」

ギノが押し殺した声でスピノザに振り返って言った。スピノザはまたも、叱り付けられた犬のように静かになった。そしてまたカタリナの方をゆっくりと振り返る。

「…そうとも、いい話だろ？だから嘘をつくべきではないという事はわかってるよな？」

ギノは押し殺した声のまま言うつと、カタリナの前まで歩いてきて、カウンターに肘をかけ、甘い声で囁くように付け加えた。

「俺は嘘と裏切りが嫌いだ。お前も知っているだろう？」

「裏切るというのはそこに信頼があるときに使う言葉だ」

カタリナは吐き捨てるように答えた。ギノは殊更わざとらしく口を笑いの形に歪め、「俺はお前を信じてるぜ、カタリナ」と言った。

カタリナはギノのほうに向き直り、そしてそのほとんど黒目しかない目を見据えた。射抜くような視線が、ブルーグレーの目から放たれた。ギノはそれを真正面から受け、口の端を歪めて笑う事で返した。

「隠し立てはするなよな。ここは大事な店なんだろう？」

ギノは笑ったまま、カウンター脇の壁に拳を突きつけて言った。その時、僅かにカタリナの表情に、嫌悪と、意思と、懐かしさのようなものが入り混じった表情が浮かんだが、またすぐにもとの無表情に戻った。

ギノはカタリナのそうした表情を見えますます口の端を歪めた。カタリナがそれを完全に無視していると、やがてゆっくりとカウンターから離れ、大またで店のドアまで歩いていった。スピノザがドアを開ける。

「女一人で店を守るのは簡単な事じゃないぜ。だからよく考えて選んだ方がいいな」

店を出る時、ギノが振り返って言った。カタリナは、何も答えない事でその言葉に答えた。カタリナが答えずにいると、ギノは含み笑いをして、スピノザと店を出ていった。

カタリナは閉まったドアを見つめていた。その視線からは、不快や嫌悪と言った感情は読み取れなかった。それらを超越した透明な倦怠感のようなものだけが、かろうじて見て取れた。

そして面倒くさそうに、シガレットケースを懐から取り出すと、身体に魔力を蓄積させる作用を持つ魔法煙草『セントライト』を取り出し、それにランプから火をつけた。

カタリナはその、とうの昔に禁止された煙草の煙を吸い込み、ゆっくりと吐き出した。そしてそのまま、煙の行く末を目で追った。

じりじりと火先が燃える音がかすかに聞こえ、煙草が短くなる間、カタリナは少しも動かなかった。そしてその顔に浮かんでいるのは、本当にそこに生命があるのかも疑わしいほどの、完全な無表情だった。やがてカタリナは、思い出したように煙草に口をつけ、大きく吸い込むと、灰皿にそれを押し付けた。

カタリナは時計に目をやり、閉店時間が迫っていることを確認すると、ゆっくりと立ち上がった。そしてカウンター横のスイングドアを押して、売り場に回った。

もうそろそろ店じまいの時間だ。カタリナは店にたった一つ付けられた窓のシャッターを閉め、そして薬棚のところに行き、その一つ一つのチェックを始めた。

薬は相当な種類があり、その効能ごとに分類がされていた。普通の薬ビンに入っているもの、細工の美しい特製の容器に入っているもの。液体のものや、錠剤のもの、毒々しい色の植物など、その見た目も中身も千差万別であった。しかしその全てに、カタリナの魔法がかかっていた。普通の薬では決して望めない、神秘的な効果をもつ魔法薬。この店は街でも数少ない、魔法薬を売る薬店だった。

カタリナはそれらの商品のチェックを、店を閉めるときに必ずする。多くは普通の薬の効果を魔力で上げた物だが、しかし中には人目に触れてはまずい物も混ざっていた。

こうした魔法薬に関する政府の規制は、近年になってどんどん厳しくなっていた。理由は治安の維持。魔法薬の中には人の体のつくりを根本から変えてしまうようなものも少

なくない。戦闘能力を激烈に高める薬が世間に大量に出回れば、それは兵器が出回ると同じくらい治安にとつて危険なことだからだ。それで政府は、民間で密造された魔法薬であればとりあえず、という形で闇雲に規制を押し進めてきたのだった。

しかし魔法薬に様々な物があるように、魔法薬を扱う者達もまた様々だ。カタリナは、少なくとも自分の商売と生き方を恥じるような事をしてはいないと自覚していた。また警察が踏み込んで、それらを摘発していったことも、カタリナがこの店の主になってから一度もなかった。この街には幾つもの特別なルールがあり、その前では警察も迂闊には手を出せないし、仮に踏み込まれても、カタリナが普段から掛けている二重三重の保険が自分を守るようになっている。

そういう訳で、カタリナは闇のとりわけ濃いこの街で、街の暗黒に片足を突っ込みながら、一人超然とその商売を続けていた。そしてカタリナは、これからも恐らく、そうした事は変わらないだろうと思っていた。

商品のチェックが終わった。カタリナは店の中を手際良く動き、棚のシャッターを閉め、入り口に鍵を掛けた。そしてレジスターからその日の売上を取り出して、金庫に納めた。そしてカウンター奥の扉から店を出て、扉に鍵を掛けると、店は完全に封鎖された。こうしてカタリナの一日の仕事は終わった。

カタリナは短く溜息をついた。店と家をつなぐ短い廊下の突き当たりに扉がその向こうがカタリナの部屋だった。カタリナはその扉から部屋に入り、電火ランプのスイッチを入れた。模造された意思の無い雷光の精霊が、天井に取り付けられたガラスの球体の中で目を覚ます。バチバチいう音とともに、オレンジ色の光が薄く部屋を照らした。

カタリナの部屋は広めのリビングダイニングルームで、その中にベッドもキッチンもある。古い丸テーブルと、古い冷気庫が、古い板張りの部屋に置いてある。部屋の奥のベッドのそばには戸棚があり、その上には年代物の奏音機械が置いてある。これがカタリナの部屋の全てであり、カタリナはこの部屋と店で一日の殆どを送っていた。他に部屋の奥の扉の向こうにももう一部屋あったのだが、今はその部屋は使われていなかった。

カタリナはキッチンのそばに置いてあるコップに、冷蔵庫から出した水を入れ、飲み干した。煙草でいがらっぽくなっ

ていた喉に冷たい水が染み渡り、心地よかった。

ベッドの傍らまで歩いていき、使い古された奏音機械のス
イツチを入れた。タベから入れっぱなしだった音石が冷た
く光り、奏音機械が動き出し、ピアノ・ドラム・ベースの
音色に溶け合って、ピアノ・コールの透き通った静かな
歌声が流れ出した。そしてテーブルのそばの椅子に腰掛け、
煙草に火をつけると、ようやく一心地ついた。

カタリナがそのままピアノの歌う古い歌に耳を傾けてい
ると、外から靴が石畳を叩く音が聞こえてきた。それは近
づいてきて、カタリナの家で止まった。そして隣の倉
庫の鍵を開ける音が聞こえてきた。

カタリナは時計を見た。クランクが帰って来る時間だった。
特に仕事もなければ、クランクは大体いつもこの時間に
帰って来る。

カタリナは、今日も生きて帰って来たか、と思った。思っ
て、思っただけだった。思っても思わなくても、死ぬ時は
死ぬ。死も生も、世の中に無数に発生する結果の一つだ。
そう思おうとするのが、カタリナの心に決められた長年の
習慣のようなものだった。

鍵を開ける音がやんだ。そしてドアを開ける音がして、ま
たすぐに閉まる音が聞こえた。そしてまた鍵を閉める音。
それがやむと、また外は静かになった。

カタリナの部屋は、ピアノの歌声だけが満ちる空間に
戻った。そしてその静かな歌声に満たされた薄暗い部屋で、
カタリナはしばらく開かれてない部屋の奥のドアを見つめ
た。

かつてカタリナのものだった部屋。今は誰も使っていない。
入ることを避けているのではなく、入る意味が今は無いだ
けだが。

カタリナは煙草が自分の指の間で灰になりかけていること
に気がついた。そしてそれにも気付かないでドアなんかを
見つめていた、自分のらしくなさを奇妙に思った。

『感傷を理解しない女だね』

今日のクランクの声がカタリナの耳にこだました。カタリ
ナは、一人薄く笑った。どこかぎこちない笑い方だった。
いつの間にか、曲は次の曲に変わっていた。綺麗で少し哀
しい曲だった。

(感傷か)

カタリナは一人思った。

(そればかりじゃないな)

そう思おうとした。そしてそんな一連の考えを打ち切るように煙草を取り出し、もう一度火をつけた。煙草に火が移るじりじりという音が聞こえ、やがてそれも聞こえなくなつた。

あとは古ぼけた奏音機械が奏でる昔日の曲だけが聞こえ、夜の静けさを深くしていった。

「Drop Me Off in Harlem」

バノム街にも朝は来る。夜よりもまだ眠りが深く、ガスが抜けたような朝だが。

カタリナは、店を開く前の朝方に、街外れの港に来ていた。そこは小さな港だが市が立つ。カタリナは薬の材料を探しに、よくこの港に足を運んでいた。

その日はめぼしいものは特になかった。一応、キマイラの羽と札のつけられた訳のわからない干物等を少しばかりの金と引き換えに買った。無駄足も馬鹿らしいと思ったのだ。港を出ると、けだるい日差しが通りを照らしていた。人のまばらな通りを街の中心に向かって歩き、店の近くの、大きな四辻に差しかかった時、カタリナはどつちに歩き出するか一瞬迷うようなそぶりを見せた。そしてその上で、店とは反対の方向に歩き出した。深い眠りに落ちた歓楽街の方へ。

人通りのまるでない歓楽街の片隅、もう完全に風景と同化して、それはあった。いつもの場所、酒場と妓楼の間のわずかなスペースに、たくさんのぼろ布が収まっていた。平日の昼間なら、大体ここにいる。カタリナはお目当てのそのぼろ布の塊に近づいて行き、声をかけようとした。

「カタリナ・クレイモア」

瞬間、ぼろ布が口を聞いた。いつものその調子に、カタリナは驚きもしないで言った。

「起きていたの、アイン」

「おめえが来たから起きたんだ」

ぼろ布の中央が盛り上がって、中からもじゃもじゃの毛をした初老の男が顔を出した。長い髪の毛はてんでにばらばらの方へ流れ、まつまりがない。しかしその奥に見える眼は一種鮮烈な光を放っている。体格は老いさばらえてはいてもいまだがっちりと骨太で、立ち上がればクランクより

大きいであろう。

「相変わらずすごい勘ね」

カタリナが素直に感心して、言った。それを聞いてアインと呼ばれた老人は、面白くなさそうに頭を掻いた。

「勘じゃねえぞ。感じたただけだ」

「どっちにしても大した物だわ。もうろくはまだしてないってわけね」

「ち、相変わらずいっぱしの口聞きやがる」

そういって愉快そうにアインは笑った。カタリナも笑いながら、ちらりとアインのまどついている服の残骸に目をやる。

本来この男は、気軽にこんな口を利ける人間ではない。この服の残骸は、元は帝都でも最高の魔道院で使われていた法衣であった。その事を知っている者が、この街にどれだけいるだろう。

しかしカタリナは旧知のその老人に、気安い姿勢を崩さず聞いた。

「実は竜モノをなにか都合してもらえないかと思って来たんだけど」

「やっぱりか。そう思って用意はしていたが……。なんだあ？

『ソウル・オブ・ドラゴン』でも調合するつもりか？」

「まあ、護身用にね」

「物騒な話だな、あの薬がどんな薬か分かっていつてるんだろうな？」

「分かってるから買いに来たのよ」

「激烈だぜ。一歩間違えばお前の身を滅ぼす事になる。分かるか？」

カタリナが曖昧に笑うと、アインは全てを見透かすような目でカタリナを見た。

「まあ、最近この街も住みづれえからな。用心に越したことはねえさな、やっぱ」

「ふん？」

「最近、筋者がずいぶん動いてる。ドンパチはねえがな。ありやあ『フアング』の連中だな。ギノのこの舎弟どもだろう。奴らの仁義を通さねえごり押しの手口にカッ力来てる組織なんかも多いみてえだ。まあギノが怖くて誰も関わりたがらねえけどな」

またギノか。カタリナは表情に出さずに、心の中でのみ苦みばしった。しかしそれも、アインには見透かされてしまった。

「あー？何だ、おめえがもめてんのか？フアングと」

アインはカタリナの返事も待たず、空を仰いで続けた。

「なんてこった！よりによってまたあいつとはな！」

カタリナは「また」というアインの言葉を、やんわりと否定した。

「いや、もめてないわ。まだ」

「まだ？」

聞き返すアインを見て、カタリナは呟くように言った。

「いや…。厄介にまきこまれる、そんな予感がするのよ」

カタリナの言葉にアインはため息をついた。

「ヤなこと、俺の目にもそんな相が見えるぜ。厄介事の相だ」

「厄介事を抱えてない薬屋なんてあるかしら」

「まあ、そうだな。しかし気いつけとけ。あそこは大してでかくもねえ組だが黒魔法関連でえげつなくシノいでる。

種族も仁義も関係ねえゴロツキの集まりだ。最近じゃあエルフの人身売買までやっているって話だ」

カタリナの表情が僅かに強張った。一瞬、昨日のギノのにやけた顔が浮かんだ。アインはそんなカタリナの様子を知ってか知らずか、早口で続けた。

「エルフは魔法実験にはもってこいの生体材料だからな。それを商品にまっとうじゃねえ魔法商社と取引して、おっかねえ武器なんかも受け取ってるって話だ。揉めると事だぜ」

「気をつけるわ。私はあいつが嫌いだから」

「だろうな」

アインは鼻を鳴らして後ろを向くと、布きれの山から薄汚れた箱を取り出した。それを開けると中には象牙のような鈍く光るごく小さな欠片が見えた。カタリナが息をついた。

「角、ね」

「ああ、クラウドドラゴンの角だ。これを削って薬に混ぜれば、大概の薬は竜属性に変質する。その効用は劇的に変化するぜ」

「相変わらずね、アイン。大した物仕入れてくるじゃない」その言葉を聞いて面白くなさそうに、往年の大魔導師にして70年代最高のドラゴンスレイヤー、アインソン・ドヴォルザークは頭を掻いた。

「おまえこそ相変わらずだカタリナ。あぶねえ橋ばっか渡りやがる」

「厄介ごとが向こうからやってくるのよ」

「難儀な女だな、おまえも。そんなとこばっかりあいつに

似やがって」

アインの言葉に、カタリナの表情が変わった。再びいつもの作り物めいた表情に戻った。そしていつものカタリナが静かに口を開く。

「…私はね、自分の身を自分で守れるようにしたい。それだけさ」

アインはその言葉に顔を歪めて、呟いた。

「そりゃ並大抵の事じゃねえぞ。あの店にいる限り厄介事は押し寄せる。そういう場所にあるんだ。わかってねえ訳じゃねえだろう」

「それで自分を守れなかったら、それまでって事さ。ところでこれ、いくらだ？」

角を指差し、露骨に話を切り上げようとするカタリナに、アインはただ、頷いて言った。

「10000でいいぜ」

カタリナが眼を見開いた。

「10000？馬鹿な、相場の三分の一だ」

「なに、饞別みてえなもんだ。だから…」

アインは角の入った箱をカタリナに放って、言った。

「うまく立ち回ってみせな」

アインの言葉に、カタリナは頷き、そして答えた。

「まあ、せいぜい慎重にやるさ」

そう言ってカタリナが立ち去ろうとしたとき、アインが思いついたように声をあげた。

「ああそうだ。おまえが来た時から感じていたんだが…」

「何を？」

カタリナが聞き返すと、アインは指をカタリナのほうに突きつけて、言った。

「お前に厄介事を運んでくるのはな、ギノだけじゃねえ。むしろ、何がしかの客が運んで来るみてえだぜ？」

アインの言葉を聞いて、カタリナの表情が少しだけこわばった。しかしそれを打ち消すように、カタリナは自分の顔から表情を追い出して、そして口を開いた。

「アインソン」

久しく呼ばれていない自分の正しい名前を呼ばれ、老人はふと顔を上げた。カタリナは考えるような顔をした後で、静かに呟いた。

「…いつかは関わらなきゃならない。そう決めたんだ。あるいは奴らと事を構える事になっても、それはいい機会かもしれないな」

「長生きできねえぜ」

「する意味だつて余り無いさ」

表情を追い出して言うカタリナを見て、アインはうめくように呟いた。

「…まさか、お前馬鹿な事考えてんじやねえだろつな」

カタリナは答えなかった。アインは何も言わないカタリナに、噛みつくように言った。

「疑う気持ちは分かるが、証拠がねえ！証拠なんて要らないとしても、手段がねえ！わかっちゃいねえ訳じゃねえだろつが！お前がどうしたいかは分かる。だが、どうすりゃいいかはまた別の話だ！分かれよ！」

カタリナは怒気をあらわにしたアインに、少したじろいだように身を引くと、ぎこちなく笑って、言った。

「…なんだいそれは、やけに真剣じゃないか？私に対する一意見にしては」

「バカ野郎オ、忠告だ」

アインは真直ぐにカタリナの目を見て言い切った。カタリナはその目に少しだけ気圧されたように目をそらし、やがて咳くように、

「…まあ、なんにしるあなたに火の粉は飛ばさないよ」

と告げた。それでアインは頭を掻き、苦みばしった顔をした。そうして、もはやカタリナと話す意味を失ったかのように背中を向けると、布の山に埋もれていった。カタリナも振りかえり歩き出した去り際に一度だけ振り返ると、アインの居た辺りは来た時と同じただの布きれの山に戻っていた。

店に着く頃には、街には霧が立ち込め始めていた。薄い霧の中を歩いてカタリナが店に戻ると、クランクがちょうど店の隣の倉庫から出てくるところだった。クランクは、カタリナに気がつくと声をかけてきた。

「よう。開店時間か？俺も今から仕事だ」

「こんな時間からか？今日はまともな仕事らしいな」

クランクの服装を見て、カタリナは言った。

「そう。キリゴ街になんちゃらつて言う金融業界のお偉方がくるって言うからさ。商談をまとめて、夕方に街を出るまで、そいつのケツにくっついてなきゃならない」

クランクは、腰につけたT字型の特殊警棒、通称スタンロッドに手をやって答えた。麻痺の魔法がかけられているのだろつ。握りの部分に簡単な呪印がいくつか刻まれている。

「警備か」

「そう。普通に」

「珍しいな。そんな仕事は」

カタリナが言うと、クラルクは片方の眉を持ち上げていった。

「心外だな、我が『ガーディアン社』は、訳のわからん非法なルーンや黒社会の大物とかばっかり守っている訳じゃないぜ。我々はビジネススマンだからな。金さえきっちりいただければ、どんなモノだって守って見せるぜ」

その胡散臭いクラルクの笑顔をカタリナが鼻であしらうと、クラルクは続けた。

「まあ、あんたも店の倉庫の番だけじゃなくてさ、何か面倒があったらうちに頼むといいや。信頼と実績のガーディアン社は、お客様の大切な財産も命も、必ず守り通します！ただし払うもの払ってくれる人だけ、ね」

「居候の癖にえらそうに」

カタリナがそっけなく言うと、クラルクは急に情けない顔になって、言った。

「それは言わない約束だろ？」

「居候は居候だ。早くねぐらを探すんだな。マフィアの抗争のとばっちりくらいじゃ壊されない、お前みたいに頑丈なねぐらを」

「へーへー。わかってるよ。そう追いたてるな。何をすることも先立つものがあるんだ。そのためにやきっちり稼がなきゃな」

「わかってるじゃないか。じゃあさっさと仕事に行くといい。私に返す金を稼ぎにな」

カタリナが手をひらひらさせながら言うと、クラルクはふんと鼻を鳴らして答えた。

「わかったよ。帰って来たら返してやる」

クラルクは尊大な調子でそういうと、カタリナの横をすり抜けていこうとした。すれ違いざま、カタリナが呟くように聞いた。

「…そうじゃないときは？」

「ああ、じゃあありや、香典っていうことで頼むわ」

クラルクはにやりと笑って言い、そして歩き始めた。カタリナはクラルクの向かっていった先をちらりと振り返ったが、もうその背中は霧に紛れて薄く消えかけていた。

その日は客が少なかった。まとまって来る時間帯もないまま、夜ももつふけていった。明日は休みだし、もう少し入ってほしいとカタリナが考えていた時、カタリナの思考を絶ち切る様にドアがけたたましく開いた。

「よう。しばらくぶりだなカタリナ」

外の粘りつくような霧の中から姿を現したのは、しかし来ても嬉しくない顔ぶれだった。

「また来たのか、ギノ」

カタリナは取り出した煙草に火をつけながら、言った。ギノとスピノザはその言葉にさえ取り合わず、ずかずかと店に上り込んだ。

「この店に女が来なかったか」

ギノはカタリナの目を睨みつけるように見て、そう聞いてきた。いよいよカタリナは自分の予感が現実になる事を確信し始めていた。

「昨日はエルフで今日は女か。人材派遣会社でも始めるつもりか」

煙を吐きながら無表情に言い放ったカタリナに向けて、ギノは一直線に歩いてきた。そしてカウンターに手をついて、言った。

「長い金髪の、肌の白い女だ。今夜辺り、来てなかったか？」

「来ていないな」

「じゃあ昨日、なまっちょろい顔のガキが来なかったか？」

一瞬、カタリナの頭に、昨夜止血薬を買っていった、あの蒼いコートの中の顔が浮かんだ。しかしカタリナの顔にその事を読み取らせる表情は、僅かにも浮かぶ事はなかった。「来ていない」

カタリナは、有無を言わせない断固たる口調で、言い放った。それを聞いたギノは何の感情も見えない表情でカタリナの目を見た。

ギノは何も言わなかった。店の空気がきりきりと固まっていった。カタリナはギノの眼を見ていた。目はそらさなかった。スピノザの口がギリギリと横に裂けて拡がり、中から血のように赤い舌と鋭い牙が覗いた。目は無表情にカタリナを見ていた。ギノが何かを言おうと、口を開きかけた。その時だった。重苦しい沈黙は、ギノの声ではなくドアベルの澄んだ音で破られた。

ギノが振り返った。カタリナも目をやった。入り口に立つ

ていたのは、肩のところを少しばかり朱色に染めた浅黒い大柄な男だった。

「悪イカタリナ！怪我しちまった！血が止まんねえ！大至急傷薬だ！」

クラシクの野太い声が店の空気を一気に攪拌した。

ギノは気をそがれた様に、ゆっくりとカタリナのほうを振り返ってきた。その間もクラシクは何事かわめいていた。

「…何だてめえ」

思い出したように、スピノザが凄んだ。しかしその声には迫力と言う物を感じられなかった。ギノは当たり前のように手でスピノザを制し、スピノザも当たり前のように従った。

ギノはいつもの表情に戻り、いつものように口の端を歪めて笑った。

「そうかカタリナ。悪かったな。まあこうしてそのへんのいろんな店に聞いてまわってんのさ。お前のトコを特別にしているわけじゃねえぜ。気にせんでくれ」

ギノはニヤニヤ笑いながらカウンターから離れ、クラシクの横を通り過ぎた。騒ぐクラシクの向こうで、スピノザがドアを開けた。ギノは一度振り返り、カタリナの方を見てもう一度、意味ありげに笑った。そしてスピノザと店を出ていくまで、カタリナはずっと、ギノから目を離さなかった。

「痛えって！聞いてんのかカタリナ！マジで早えートコ傷薬よこせって」

「もう行ったよ」

カタリナがまだ硬さの取れない顔のまま、ぼそりといいつつ、クラシクは聞き返してきた。

「何が！？それより薬だよ！早くしてくれってんだ！」

詰め寄ってくるクラシクを見て、カタリナは少しだけ表情を緩めた。そうしてカウンターの後ろの薬棚から普通の傷薬をとりだし、それをクラシクに差し出した。

「ほら」

「え？なんだ、つけてくれねーの？」

「馬鹿か。自分でつける」

クラシクがニヤニヤしながら言うのを、カタリナはそっぽを向いて返した。クラシクはシャツを無理やりまくって肩の傷を出した。血は派手に出ていたが、傷はごく浅いようだった。その傷に大雑把に薬を塗りつけ、クラシクはシャツを戻した。

「ありがとよ。いくらだ？」

「いい」

「え？」

「代金はいい。安い物だしな」

「あれま。珍しい。じゃ、これはそのまま返すぜ」

そういつて懐から出したクラランクの手には何枚かの札が握られていた。

「なんだこれ？」

「昨日借りた金だ。今日の仕事で臨時収入が入った。おかげさんで今月も乗りきれたぜ」

「ああ、なんだこんなに早く返ってくるとは思わなかった」カタリナは金を受け取り、レジスターにしまい、ふと手を止めた。そして時計に目をやり、少し考えるような表情を見せた後、レジに鍵を掛けた。

「あれ？今日はもうあがりか？」

「ああ、ちよっと今日はもう客も来そうにないし…」

カタリナはそう言っ、静かに息をつき、

「…それに、少し疲れた」と続けた。

それを聞いたクラランクは、少しの間中空を眺め、そして思いついたように口を開いた。

「だったらさ、このあとちよっと付き合わないか？」

「…酒か？」

「まあ金も入った事だしな。たまにはいいじゃねえか」

「おごりだな？」

カタリナの、下からすり上げるような視線に、クラランクは唇の端を持ち上げて答えた。

「借金の利子のひとつも払えないほど、俺は甲斐性無しじゃないぜ」

その見栄っ張りな自信に、カタリナは少し笑って、答えた。

「…そつだな。たまには悪くないな」

「Unforgettable」

バノム街の繁華街の端っこ、中央の華やいだ明るさとはまるで縁を絶ち切ったようなうらぶれた街並み。石でできたその古めかしい通りに、世間の流れから離れるように建っているその店の中。店のそこかしこにある電火ランプの黄

色い光が黒いバーカウンターに鮮やかに映り込んでいる。磨き上げられたそのカウンターの中には、白い仕立てのいいシャツと黒いチヨツキを着た、背の低い中年がグラスを磨いていた。鬱蒼とした髭に覆われるようにしてあるその顔。そこから覗く目は、ドワーフに特有の、世の中を見透かしたような、硬く静かな光がたたえられていた。

「ロギンズ。ギブソンをくれ」

バーカウンターを挟んで、二人がドワーフに告げた。ロギンズと呼ばれたその中年のバーテンは何も答えず、頷きもせず、しかし手だけは止めた。そして流れるような動作でミキシンググラスを扱い、音も無くギブソンを作った。その動きには気品さえ感じられた。

「私にはノツカーズを」

この国で作られるジンの、代表的な銘柄をカタリナが口にする時には、ロギンズの手はすでにジンをゴブレットに注いでいた。これがいつもの流れだった。

「ほんじゃま、乾杯でも……」

克蘭クがグラスをカタリナのほうにむけて言った言葉は途中で途切れた。そのときはもうカタリナはグラスに口をつけていたからだ。110ブルーフの強烈なジンを、カタリナは喉を鳴らして一息に飲んだ。そして克蘭クを見て、気がついたように、

「どうかしたのか？」

と言った。克蘭クはふてくされたように、乾杯のために掲げたグラスをそのまま口に持っていた。カタリナはその様子を、少し愉快そうに見ていた。カタリナが自分のグラスに目をやると、すでに二杯目が注がれていた。

パールオニオンをかじる小気味良い音が隣から聞こえた。

克蘭クも、もう一杯目のギブソンを片付けて、残されたパールオニオンにとりかかっていた。克蘭クは、口の中の球体を飲みこんで、口を開いた。

「あんま遠慮すんなよ。俺しばらくは金持ちだから」

「頼まれてもしない」

そういつて二杯目に手をつけるカタリナを見て克蘭クは呆れた様に笑った。カタリナも少しだけ笑いながら、シガレットケースを取り出した。煙草に火をつけると、克蘭クが「煙草吸いすぎよ、お前」と笑った。自分の口元の青白い火口を見てカタリナは思った。

『セントライト』。生命を削って、魔力を上げる禁断の魔法煙草。この煙草がそんな代物だと、克蘭クは知らないだ

ろつ。

だがカタリナは、克蘭クの横顔を見て、それが知られていない事を少し喜んだ。知らなくていい事だと、思った。そう思おうとしながらゴブレットに口をつけ、克蘭クのグラスに目をやった。グラスには、やはりもうすでに、新しいギブソンが注がれていた。

克蘭クはほとんどジンしか飲まない。カクテルならギブソンだけだ。それもたくさん、胃に放りこむように飲む。しかしこの街の男に多い、節操のない飲み方でも、あるいはいじけた様な飲み方もしない。乱れない、気持ちのいい飲み方をする男だった。

あの人に似てるな。カタリナは紫煙を吸い込みながら思い、それで少し笑った。

「珍しく笑ったと思ったら思い出し笑いかよ。気持ちわりい奴」

克蘭クがギブソンを片手に言った。飲み方だけだな、似てるのは。カタリナは頭の中で、さっきの考えを補足した。

「だから私はあんたが嫌いなんだ」

「何か言ったか？」

そう言っただけで克蘭クはにやりとした。カタリナは呆れたようにゴブレットに口をつけた。

「しかしなんだな。初めてじゃねえのか。ここでこういう風に飲むのは」

克蘭クが思い立ったようにいった。その言葉に、カタリナは自分の記憶を探った。

「そうだな：そうだったな」

「始めてここに来た時は：あんなだったからな」

克蘭クがそう言っただけで皮肉に笑う。カタリナもそれを聞いて、克蘭クと始めて会った時の傷だらけの姿を思い出していた。

もう三ヶ月前になるだろうか。その夜、カタリナは一人でグラスを傾けていた。時間は遅く、客は他に誰もいなかった。カタリナにはそうして、時々この店に来て、何も語らないドワーフの中年の前で独りで飲む日があった。いつものように決まった量を飲み、いつものように決まった金を置いていく。しかしその日は違った。カタリナがもう帰ろうと思いついたとき、店のドアを開けて傷だらけの男が倒れこむように入ってきたのだ。た。

店に入ってくるなり気を失ったその男を、ロギンズはカタリナの店まで担いでいってくれ、そのあとはそのまま自分

の店に戻った。

カタリナはその傷だらけの男に傷を治す薬を調合した。三時間かけて、その男の傷はふさがった。夜が明ける頃、その男は目を覚まし、自分を助けた女に感謝の意を示した。聞けば男は、ある変わった「警備会社」に所属していて、依頼を受ければ、人でも物でも守る仕事をしていると言った。その、時には法に触れる仕事の日々の中、あるギャングの抗争だかに関わってしまい、家のアパートを巻き込む爆破事件に巻き込まれたのだ。

その男は、辛くも生き残ったものの、ねぐらを失い住む所がないと言った。それを聞いたカタリナの頭に一つの考えが浮かんだ。

カタリナは、その男に、家の隣の倉庫を、住み込みで警備してくれるかと提案した。男は二つ返事でOKした。カタリナは時々こそ泥の入る倉庫を、賊の手から守れて安心だし、男は新しいねぐらを見つけて喜んだ。

こうして、カタリナと克蘭クの持ちつ持たれつの関係が始まったのだった。

「運が良かったのさ。俺は意識が朦朧としていて、この店に入った事なんて覚えちゃいない。だがたまたま店には変な薬師がいて、頼みもしねーのに傷を治してくれやがった」
「何を言ってる。けちなチンピラの襲撃なんか受ける時点で、十分運が悪いだろう」

克蘭クはカタリナの素っ気無い言葉に含み笑いをした。カタリナはそんな克蘭クを見て、ふと、視線を落として続けた。

「…まあ、それを言ったらもっと運の悪いことがあるけどな」

「なんだ？」

「この街に、生まれついたことさ」

その台詞を聞いて、克蘭クの表情がこわばった。

克蘭クは薄く笑って視線を落とす、

「…そうかな。そうかもな」と呟いた。

克蘭クはしばらく酒の入ったグラスだけを見ていた。そしてやがて目を上げ、続けた。

「…まあ、とっくに慣れちまったけどよ。それにな、確かに運が良かったこともあるぜ」

カタリナは克蘭クのほうに目をやって、その先を促した。
「なんだ？」

「ギブソンのうまい店を見つけたとき。俺はギブソンが好きなんだ」

そういつて克蘭クは、ロギンズのほうに笑いかけた。ロギンズは髭の奥に収まっている小さな目を緩めて、克蘭クに笑い返した。彼は自分の店を誉められたときと、自分の客が喜んでいるときだけは素直に喜んでくれる。カタリナも克蘭クも、そんなロギンズが気に入っていた。

その後二人は、しばらく静かに飲んだ。その間にどちらからともなく、ぼつりぼつりと、色んな事を話した。酒の量も少なくはなかったが、二人の目には酒気はさほど感じられなかった。そんな中、どうした具合でそんな話になったか、克蘭クがこんな事を聞いた。

「なんであんな名前の店なんだ？」

カタリナは目で克蘭クに聞き返した。

「？」

「いや、『魔薬紳士の店』って言うけどさ。アンタ口は悪いけど、さすがに男には見えないだろ。なんで紳士なんて看板つけてんだ？」

克蘭クは本当に素直な口調で、その疑問を口にした。しかしカタリナの反応は、そう素直なものではなかった。克蘭クから目をそらし、自分の前に並ぶ酒瓶の棚に目をやって、しばらく何か思い出すような表情をした。そうしてやがて、呟くように静かに言った。

「…あの店な、私の店じゃなかったんだ」

「え？そうだったのか」

「そう。ある男の店なのさ。男の名前はジーノ。そいつのつけた名前だったんだ」

克蘭クは聞きながらグラスに口をつけた。中身はノックカーズだった。ロギンズが入れてくれたのだ。克蘭クは少しだけ驚いた後、もう一度口をつけた。そして少し息をついて、ゆっくりと聞き返した。

「なんだったんだその男」

「なんだったって？」

克蘭クは少し苛ついたように付け足した。

「アンタの…友人か？家族か？恋人か？」

カタリナは克蘭クのその質問に、遠い目をして答えた。

「…きつとその、全部かな」

そしてグラスを両手で包み込むようにして持ったまま、話し始めた。

「いつからか良く覚えてないが、物心ついた頃から私はこの街の道端にいた。いつも寒くて、野良猫みたいな生活をしてきた覚えはある。だけど両親の事なんか全く覚えてないし、今更もつとつでもいい。私にとつての親は、私を捨てた、十五歳離れたその男だった」

克蘭クがその言葉を聞いて、ふと思いだったような顔をした。

カタリナは続きを言わなかった。克蘭クが何か言おうとするのを待っている様だった。克蘭クは、しかし何も言わなかった。しばらく考えるような、何かを思い出すような顔をしたあとで、ギブソンを飲み干し、促した。

「その…ジーノって奴も薬師だったんだな」

「煙草が好きで、商売のへたくそな男さ。腕は悪くないから、客はたくさんいたのにね。貧乏人ばかりの客から金は余り取らなかった。この街だけじゃなくて、離れた町にも患者がいれば飛んでいく。いつも薬屋を必要とする人のところを飛びまわって、おまけにヤクザに脅されても、麻薬だけは作らないなんて、およそこの街で商売するには向かない男。でも私は、その男との生活が楽しかった」

グラスを見ながら、しかし大事な宝物を眺めるような目で、カタリナは静かに語った。克蘭クは、そんなカタリナの横顔を見ながら、呟いた。

「今のアンタに、似てるもんな」

「…そうかも知れない。だから私も、ジーノの持っている薬師の技術を習った。そうすればジーノの手助けができると思っただからだ。ジーノは全てを教えてくれた。仕事だけじゃない。この街で生きていくためのあらゆる事を教えてくれた。そうして十年と少しが過ぎ、私が一通りの技術を見につけた頃、ジーノはいなくなった」

克蘭クがグラスを持っていた手を止めた。

「いなくなった？」

「そう。私には何も言わないで、ジーノはいつてしまった。それからずっと帰って来ない。ジーノがいなくなつてちょうど一週間が経った日、私は一度も入ったことがなかった彼の部屋に入った。そこにはジーノが残した手紙があり、こう記されていた。『カタリナ、君はもう一人でも生きて行ける。私がいなくなった時からの、君が生きていく足がかりとして、この店を贈る』と」

カタリナは消え入りそうな儂い声で、短い昔話を語り終え

た。クラルクはしばらく何も言わず自分のグラスを見つめていたが、やがて低い声で聞いた。

「…それからずっと、アンタは一人で生きているのか」

「そうだな。ずっと一人だった。あの店を守って、ずっとあそこにいる」

「帰ってくるかわからない男を待ってか」

クラルクは少し眉間に皺を寄せて、カタリナに顔を向けた。そして、はっとした。

いつも冷たい無表情と、作り物めいた笑いしか見せない女が、今は掻き消えそうに寂しげな表情で笑っていたのだ。それはクラルクが始めて見る、カタリナの本当の表情だった。

何も言えずクラルクが黙っていると、カタリナはふっと目を伏せて、呟いた。

「私、バカかな」

クラルクは、しばらく動かなかった。やがて、どうにか表情を崩し、そしてぎこちなく前に向き直って、言った。

「…その男は随分、男前だったんだな」

カタリナはその漠然とした言葉に不意をつかれたように、顔を上げた。少し考えるそぶりを見せた後、聞き返した。

「どういうことだ？」

クラルクはニヤニヤしながら、答えた。

「アンタがまるで、女の子みたいだ」

カタリナはクラルクのからかうような言葉に、白い陶器のような頬を僅かに赤くした。クラルクはそれを見て愉快そうに笑った。カタリナが何か言おうとクラルクの方に向き直ると、それに取り合わず一人でジンをあおって、「美味しい。アンタもどうぞだよ」と言った。

「だからお前は嫌いなんだ」

カタリナはふてくされたように前に向き直り、ロギンズに言った。

「ノツカーズを。こいつとは別のボトルから」

ロギンズは手早く新しいボトルを開けて、カタリナに供した。

クラルクは静かにノツカーズをあおった。カタリナもグラスに口をつけた。そして顔をクラルクの方に少し向けて、聞いた。

「お前は？」

「ん？」

「私は話しすぎた。今度はお前の番だ」

「なるほど、そりゃ正論だ」

克蘭クはくつと笑って言い、カタリナの問いを待った。カタリナは訊ねた。

「お前の親は？」

「母親がいて、昔いなくなつた。実際どうなつたのかは不明なんだ。それから姉貴がしばらく俺を育ててくれた。だがある日俺と姉貴はヤクザモンの抗争に巻き込まれた。近くで大きな爆発が起き、俺は運良く命を取り留めたが、姉貴は俺をかばつたのか、苦しむまもなく死んでしまった」

カタリナの顔が僅かにしかめられた。克蘭クの首筋にある大きな傷が酒気を帯びて赤く浮かび上がっているのが見えた。

カタリナは克蘭クの人事のような言葉に、視線を落とし、何も答えなかった。克蘭クはそのカタリナの気持ちを感じ、笑いかけても、穏やかな声で続けた。

「まあ…割と良くある話だよ」

ふんと鼻を鳴らす克蘭クに、カタリナは前より少し近しいものを感じていた。似たもの同士かもしれない。そう思ったが、口にはしなかった。

「そんなとこだ。まあ姉貴にはたまに墓参りでもして、まだ生きてるぜって事を報告するけどな」

「墓参りか」

カタリナはその言葉に、僅かに表情を変えた。克蘭クはそんなカタリナを見ながら答えた。

「そうさ、唯一の肉親だったからな。ああ、明日辺り休みだから、行って来るかね、たまには」

克蘭クはつとめて落ち着いた穏やかな声で言った。しかしカタリナにはその声は聞こえていないのか、何か考え込むようにグラスを見つめていた。克蘭クはそれを不思議そうに見ていたが、じきに再び、酒をあまり始めた。

カタリナはやがて静かに顔を上げた。何か思い出すように、どこか遠くを見た。

「カタリナ？」

克蘭クが声をかけると、カタリナは立ち上がった。そして克蘭クの方を見て、少し笑って言った。

「少し、回ってしまつた。先に帰らせてもらつよ」

「おうそうか？俺はもう少し飲んでから帰るがな。送りは？」

「すぐ近くだから。」馳走さま

「どういたしまして」

クラルクは手をひらひらさせながら答えた。カタリナは古い木のドアを開け、店を出た。背後でドアが閉まる軋んだ音がした。

外に出ると、まだ濃い霧が立ち込めていた。あまりの霧の深さにカタリナは顔をしかめ、方向を確かめながら歩き出した。

バーから店に戻る短い道を帰る間、背後に視線を感じた。ギノか！？と思い一瞬カタリナは見を固くした。しかしすぐに、視線の主が分かり緊張を緩めた。霧の向こうから、ロギンズバーのドアが閉まる軋んだ音が聞こえたからだ。クラルクだ。変な気の使い方をして。

カタリナはそのクラルクの、奇妙な配慮を可笑しく思ったが、悪い気はしなかった。何度も歩いたその道を、カタリナはいつもより少しだけ気分良く帰れた。

店の裏口のカギを開けて、そのまま部屋に入った。大分遅れて、倉庫の鍵を開ける音が聞こえ、そして重いドアが閉まる音がした。

カタリナは電火ランプを灯した。ぼんやりとカタリナの古ぼけた部屋が浮かび上がった。冷気庫から水を取り出し、一息に飲む。強い酒で乾いた喉に、水は心地よかった。

今日は喋りすぎた。そう思い、反省に似た気持ちになった。溜息が短くもれた。

先刻酒場でしたクラルクとの会話を思い出した。そしてその会話は、カタリナに明日すべき事を決めさせてくれた。

カタリナは静かに一息をついた。そして部屋と店をつなぐドアを開けた。そしてその廊下の途中の、煉瓦で組まれた壁の一部を強く手で押すと、そこがへこみ、そして扉のように壁が開いた。その奥には小さな、工房の様ような部屋があり、中の棚の上に、アインから買った小さな箱が置いてあった。

今日の内に作っておかなくては。カタリナはそう思い、その箱を手にした。中の小さく輝く角の欠片を確認し、そして入り口が開きっぱなしになっていたことに気付き、閉めた。

そしてしばらく、廊下に静寂が流れた。

やがて静寂を破るように、隠し扉が開く音が聞こえ、カタリナが部屋に戻った。その日すべき事を全て終えたカタリナが、する事はもう寝るだけだった。

カタリナは寝る準備を整え、そしてベッドに腰掛け、明日の事を思った。

明日、あの人に会いに行こう。

そう決めてカタリナは部屋を照らす電火ランプに手を伸ばし、スイッチを切った。

ランプが消えると、後はもう静寂を破る物は何も無く、そして全ては闇に包み込まれた。

「Rain」

夜が明けて、翌日の昼下がりに、街を包んでいた霧は細かな霧雨に変わり始めていた。いつもは街を覆い隠す霧が雨になつたおかげで、街が幾分かクリアーに見えた。

その街からも少し外れた旧市街には、人の姿はほとんど見られなかった。雨のせいも手伝つて人の姿の見えない往来は、まるきりゴーストタウンのようだった。

その死んだ街の果てには生者がやがて辿り着く処、そして死者の永遠に眠る処があった。

シエスコ―墓所。バノム街の住人が、やがては行きつく場所がそこだった。近くに住む年老いた墓守は緑の手入れを欠かさない。綺麗に切りそろえられた緑が、初夏の暖かい雨に濡れて光っていた。そして整然と並ぶ墓石が、完結した静けさをたたえて佇んでいた。

その中に生者の影があった。墓石の一つの前にしゃがみこみ、墓前に花を添えていた。花を供えた女は、そのブルーグレーの憂いのある目で、墓石を見つめていた。墓石にはそこに眠る者の名が刻まれていた。

『ジーノ・クレイモア 959〜998』

墓の前のカタリナは、その名を懐かしそうに見ていた。そして何か思い出すように、目をつぶった。

いつのまにかカタリナの後ろに、気配があった。傘を差して、後ろに立つ男の、引き締まった体からにじみ出る生命力はこの場所にそぐわない感じさえするが、しかしその顔に称えられた打ちひしがれたような表情は幾分かふさわしいと言えた。

「雨が降ってきたから、貴方に出くわすことも無いと思つたのに」

カタリナは振り返らずに、目だけ開いて言った。カタリナ

の後ろで克蘭クは、その小さな背中を見ていた。言葉を発さない克蘭クに、カタリナは続けた。

「寒くてひもじかった昔のことを思い出すと、いつもジーノは私の頭をなでて言ってくれたわ。過去は振り返らなくていい、そんなものに縛られることはないって」

克蘭クは何も言わなかった。カタリナはそのまま静かに続けた。

「でも私には結局できなかった。過去を忘れさせてくれた人のおかげで、また過去に縛られることになったわ」

「……」

「今でもこうして、時々会いに来るのよ」

カタリナは、幽かに笑って、言った。

「私、バカかしら」

その時、カタリナの背中に降りかかっていた雨が止んだ。克蘭クが傘をカタリナに差し掛けたのだ。

カタリナが振りかえり、見上げると、克蘭クが何も言わず見下ろしていた。克蘭クは、寂しそうな、しかし包み込むような優しい目で、雨に濡れたカタリナを見ていた。

カタリナはそんな克蘭クの目から自分の目をそらし、墓石に向き直った。眼を伏せ、そしてやがて静かに言った。

「…そんな目で見えないで。だから貴方が嫌いなものよ」

カタリナはゆっくりと立ち上がった。克蘭クはカタリナの隣に回って、一つの傘で自分とカタリナを覆った。そして静かに、口を開いた。

「女みたいな話し方だ」

「この人の前だから」

カタリナは墓石を見つめながら言った。克蘭クも墓石を見つめたまま、語り掛けた。

「ここにるのが、ジーノか」

「そう。私のたった一人の家族」

「なんで今日ここに？」

「そうね…もしかしたら」

カタリナは立ち上がりながら、呟いた。

「もう来られなくなるかもしれないから」

背後で克蘭クの表情がこわばるのが、カタリナにもわかった。墓石を見下ろしたまま、カタリナは続けた。

「ちょっと何か揉め事があると、ここに來ることになっているのよ。もうすぐ会えるかもねって、報告しに」

カタリナは振りかえった。そして今度は、カタリナが息を飲む番だった。

クラルクは、怒っていた。いつも皮肉めいた笑みを浮かべていたクラルクの、怒りの表情を見るのは、カタリナは始めてだった。

それでも何も言わないクラルクを見て、カタリナは少し戸惑ったように、寂しげに笑い、墓石の方に向き直った。やがて強張ったような低い声で、

「バカな、女だね」

とクラルクが呟いた。その低い声は、まるで独り言の様に聞こえた。

「…そうね」

カタリナは静かに答えた。本当に、消え入りそうなほど寂しげな背中だった。

それからクラルクの声はしなくなった。カタリナは、そうよね、と思った。思っても思っただけだった。あとは霧雨が地面を包む幽かな音だけが辺りを包んだ。

やがて静寂を破るように、立ち去る足音が聞こえた。しばらく躊躇した後、カタリナは離れていく足音の方を振り返った。

水に煙る墓所の、もうずっとと向こうに、クラルクの背中が一瞬見えた。そしてすぐ、視界から消えた。カタリナは墓石に視線を戻そうとして、そして気がついた。

クラルクの立っていた地面に傘が残されていた。さっきまでカタリナに差し掛けられていたあの傘だった。

カタリナは、ほんの少しだったけど、今度は本物の微笑を見せた。

本当にバカだな、と思った。

「Memories of you」

しばらく経って、カタリナは墓所を後にした。雨は止まなかったが、今はこの静かな雨が好ましかった。傘にあたる水滴の音は、カタリナの心を落ち着かせてくれた。

街の中心部に近づいても、やはり人通りは殆ど見られなかった。途中黒猫が雨に追われる様に路地裏にかけ込んでいくのが見えた。カタリナはそれを横目で見送りながら、

「ロギンズ・バー」のある通りの角を曲がった。

その時、カタリナは何か幽かな、泣き声のようなものを聞いた気がした。

カタリナはあたりを見回した。耳を済まして、聞こえる

のは雨音ばかりだった。だが、確かに聞こえた気がしたのだ。

そしてカタリナは目を見開いた。バーの脇の路地に、倒れている人影が見えたのだ。

カタリナは一瞬逡巡し、辺りを伺った。そして人影がない事を確認すると、傘をたたみ、路地に駆け込んだ。

酒瓶の入っていた木箱などを乗り越えるようにしてカタリナは人影に駆け寄った。そして仰向けに倒れているその顔を除きこんだ。

豊かな金髪を雨に濡らした、美しい女だった。所々破けた白いドレスのような服の各所に、赤黒い染みが飛び散っていた。蒼白な顔、そしてその目は静かに閉じられていた。カタリナはあくまで落ち着いてその手首を取った。脈があることに安堵の息をつく。しかしその横たわった体には、雨水で薄まった赤い血が流れてきているのを見えた。カタリナは出血の部位を探した。すぐに破けた肩口の辺りに、裂けた傷口が見えた。カタリナはコートの内ポケットに止めておいた包帯などの応急処置の道具を取りだし、早く止血した。

「誰？」

女が突然、目を開けると共に声を上げた。

「薬屋です」

カタリナは包帯の端をピンで留めながら答えた。女は息も荒く、続けた。

「奴らの手先？」

「奴らが誰かは知りませんが、私はただの薬屋です。路地に倒れている人を見てしまったから、とりあえずこうしているだけです」

その答えに、女はしばらく考えるような表情を見せた後、静かに息をついて、言った。

「ありがとう…助けられたのね、私」

「応急処置しただけです。幸い大きな怪我はなさそうです。他にも怪我があるようですし、おかしな菌や呪いの類に冒されていないとも限りません。病院へは？」

「病院はだめ！」

女が突然声を張り上げた。

「…病院は警察に連絡が行くでしょう。だからだめなの」
カタリナは震えるような声でそう言う女を、静かに見下ろしていた。女は続けた。

「…そう言う事だから。でもありがとう。あなたももう行っ

の方がいいわよ」

このとき、カタリナは自分に選択が課せられたことを悟った。

もちろん、このまま女の言う通り、店に戻りいつものような日々を続ける事もできる。しかし、カタリナの心に去来したのは、かつて自分と過ごした男の姿だった。

『胸を張って生きたいんだ。こんな街で生きているからこそな』

彼の口癖だった。

カタリナは女にもう一度視線を落としたり。そして見た。金色の瞳を、透き通る肌を、長い金髪を、そして、尖った耳を。

ギノの顔が目の裏に浮かぶ。『長い金髪の、肌の白い女だ。来なかったか？』

ジムの意見を思い出した。アインの忠告が耳によみがえった。カタリナの理性はこのまま帰る事を選んでいた。

カタリナの口が開かれた。

「私の店で、治療しましょう」

しかし信念がそれを拒んだ。意志がそのセリフを口にさせた。

女の眼が、何か不思議なものでも見るように見開かれた。

カタリナの目を見て問い返す。

「…どうして？」

「すぐ近くですから」

「そうじゃなくて！どうしてこんな、厄介事が形になって現れたような女を、自分の店に運ぼうとするの？」

どうしてかしらね、ジーノ？

カタリナは答えなかった。代わりに静かに、微笑んだけだった。

女はそれを見て、何か言う気をそがれたように、うつむいた。そして体を起こした。

ジーノ。貴方もいつもこうして厄介事に首を突っ込みたがってたわね？

「薬師だからです」

カタリナは女に手を差し伸べて答えた。

「この街にも、マトモな薬屋がいるんです。麻薬を流すばかりが、薬屋の全てじゃないんですよ」

柔らかく笑っていったその答えには、簡潔なその言葉よりずっと深い優しさが込められていた。エレノアは、不思議なものを見るように、しかしどこか救われたような表情で

カタリナを見た。そしておずおずと、手を伸ばし、差し伸べられたカタリナの手を取った。

カタリナは女が起きあがるのを手伝いながら、そんな事を思っていた。

私、今なら分かる気がするわ。

カタリナと女は、寄り添うように路地を通りに向かって歩いていった。女は引きずっている足が痛むのか、時々顔を歪ませていた。

路地を出た。カタリナが左右を確認する。人影はどこにも見えなかった。空を見上げた。霧雨は止む気配がなかった。

「こつちです」

カタリナと女は、通りに出た。

通りを女と二人、寄り添うように店に急ぎながら、カタリナは、こんな日が来るのをずっと待っていたような気がしていた。

「When Your Smiling」

「気がつきましたか」

カタリナが、女の顔を覗きこんで言った。

ここは、カタリナの店と家を繋ぐ廊下につけられた隠し扉の中の、工房兼治療室だった。店の半分ほどのスペースに種々の薬品が並べられた棚が壁の殆どを覆っていた。そしてその真中にベッドがあり、エレノアの体はそこに横たえられていた。

「ええ…ありがとうございます。何かから何まで」

女の傷は何時間もかけて全て塞がった。足の痛みも、失血も、カタリナが秘術の限りを尽くした薬で、全て癒された。

血と雨に濡れた女の服も、カタリナは着替えさせた。

女は上体を起こしながら、言った。

「名前を聞いてなかったわ。私は、エレノア・ゲイブルズ」

「カタリナ、クレイモアです」

「そう、ありがとうカタリナさん」

エレノアが柔らかい声で言った。その声には心からの感謝がこもっていた。しかしエレノアは、急に視線を落とし、続けた。

「…だけど、これ以上迷惑をかけられないわ。もし奴らがここにまで来たら貴方も…」

「奴らってギノ達の事ですか」

遮るように言ったカタリナの顔を、エレノアははっとして見返した。エルフに特有の、金色の眼が、カタリナを見ていた。

「…知っているの？」

「私もあいつには、ちよっとした借りがあるんですよ」

エレノアはカタリナの顔をまじまじと見た。カタリナは尋ねた。

「話してもらえませんか、事情を」

カタリナの言葉に、エレノアは考え込むように俯き、そしてやがて、静かに話し出した。

「…私は見ての通りエルフで、ここからずっと西の村で静かに暮らしていたの。伝説のように、何も道具をつかわなくとも魔法が使えるエルフなんか今の時代には残っていない。小さい頃は良く近所の子供達にからかわれたわ。尖った耳に細い体。村でも数の少ないエルフは、悪がき達の良い的だったのね」

エレノアは息をついて続けた。

「そんな時、いつも隣に住んでいたベイスが助けてくれた。ベイスは喧嘩が弱くてよく反対にやられてたけど、それでもよく私を元気づけてくれた。そして良く言ってくれたわ。

『いつか強くなって、エレノアの事守ってやる』って…」

エレノアは、しまっていた大事な想い出を取り出すように、昔話を続けた。

「大きくなって、ベイスは『強くなるために』と言って、街に出ていった。私には手紙をくれたけど、いつかその手紙も途切れがちになり、ある時期を境にぶっつりと途絶えてしまった。でも私は彼が元気でやっている事を祈ってた。そしてようやく再会できた時、その祈りが叶っていた事が分かったわ」

エレノアは少し視線を上げて、ため息をつくように、言った。

「彼はヤクザになっていた。このバノム街で。しかもあの、ギノのところの組織の。そして私は、ギノが人身売買の商品にしているエルフとしてあの組織に捕まえられ、そこで彼と再会したのよ」

カタリナはただ黙って聞いていた。エレノアはカタリナの方を見ないで続けた。

「彼はすぐに、私だと分かったみたいだったわ。そして二人になった時に、流されるままに道を踏み外してしまった

自分の人生を悔いていると私に告げた。街の恐ろしさを、生まれ育った町の懐かしさを語り、そして私と逃げようと言ってくれたのよ。」

エレノアはもう、独り言を言うように語っていた。カタリナは何も言わず、聞いていた。

「彼は私を逃がす為に闘い、だけど失敗し、捕えられた。私は傷を負いながら、彼をおいて逃げてきた。そして路地裏で倒れた……」

そこから先は、カタリナの知っている通りだった。エレノアはカタリナに視線を向けた。

「何故私だけが逃げ出せて、彼が捕まっているんだろう。」

私は彼に何をしてあげられたんだろう。彼は私を守るために強くなるうとして、道を踏み外した。私は彼のために何をしてあげられるの……!？」

「彼を助け出すんです」

エレノアがはっと顔を上げた。カタリナはエレノアの目を、まっすぐ見つけていた。エレノアはしばらく正面からカタリナの目を見つめていた。カタリナは続けた。

「もう一度フアングのビルまで言って彼を救い出し、そして二人で街を出るんです」

「……できると思う？」

エレノアは目を伏せ、呟いた。

「あのビルにいるヤクザ達を退けて、彼を助けだし、逃げることができると思う？」

「やるんです」

「かっこいい事言わないでよ……」

エレノアが立ちあがって声を上げた。

「言うだけなら誰だってできるわ!でもキノは、あいつは危な過ぎるのよ!貴方もこの町の住人ならわかるでしょう!」

「だったら、路地裏でうずくまっていれば良いんです」

エレノアがピクリと、口をつぐんだ。

「……何もしないで、後悔を胸に抱いて、そうしてこれからも生きていくのが好きならそうすればいい。だけど、それが嫌なら、自分ができる事をするんです。野良猫みたいに、雨に追われて路地裏に逃げるより、ずっと上等な生き方でしょう!」

「貴方の言っている事は、理想論だわ!」

エレノアが、カタリナを射抜くような目で、見返していた。そして低い声で言った。

「…女一人で、ヤクザ達と立ち向かう。そんな現実が、この街に起きると思えるの？」

「女二人なら」

エレノアが、虚をつかれたように、息を呑んだ。そしてカタリナの顔を、まじまじと見た。その陶器のような顔には、しかし嘘もごまかしも無い、真剣そのものの表情があった。

「そんな…だめよ！あなたまで巻き込まないわ！」

エレノアが声を上げてその申し出を拒んだ。しかしカタリナははねつけるように答えた。

「言っただでしょう。私も奴に借りがあると。これは私の闘いでもあるんです」

エレノアはカタリナの目を見た。その冷たい表情の奥には、燃えあがるような意志があった。それがエレノアにも感じられた。

やがてエレノアは、ふと表情を崩し、手をカタリナに差し出した。

カタリナはその手を握り、呟いた。

「精霊にかけて、生きて彼を救い出す事を」

エレノアは握り返して、答えた。

「…誓っわ」

そして二人で頷きあった。

「…そうと決まれば、準備があります。こんな時のために用意したものが色々ありますから。取ってきます」

カタリナはエレノアにそう言っつて、狭い治療室を出た。

隣の倉庫の中にそれはある。いつでも取りに行けるよう、入り口のすぐ近くに全ては用意してあるのだ。廊下を通り、店のドアを開けて外に出た。治療している間に日は落ち、辺りは雨音と闇に包まれていた。雨の中倉庫の鍵を開け、中に入った。中は暗かったが、闇の中でも位置がわかる扉の近くの金庫を開けた。中にはバグベアの皮の黒いコートと、弾帯のようなベルトに薬品の入った試験管が幾つも留められたものが入っていた。それを取りだし顔を上げた時、カタリナはようやく気づいた。倉庫の隅の暗がりにも人影があった。

一瞬、カタリナの心臓がどきりと音を立てた。しかし、暗がりに立っていたのはクラルクだった。カタリナは短く安堵の息を吐き、その顔を見た。暗がりの中の表情は、どこか悲しんでいる様子にも見えた。

「客か」

暗がりの中の影が口を聞いた。

「そう。もう治ったけど、少し重い怪我の」

「髪が長くて肌の白い？」

カタリナは息を飲んだ。

(違うよ)

いつものカタリナなら、表情も変えず、即座に答えていただろう。しかしその時だけは答えられなかった。それがどうしてか、カタリナにはわからなかった。そしてきつと、わからなかったから、そう答えたのだと思った。

「…あの人を助けるよ」

カタリナは克蘭クに、静かな声で、それだけ伝えた。克蘭クが低い声で聞き返した。

「ギノの探していた？」

「そう」

カタリナの答えに、帰ってきたのは沈黙だった。屋根に当たる雨音が、その静寂を深くしていた。やがて、

「…どうしても、首を突っ込んでしまっただな」

克蘭クが暗がりから、静かな声で言った。

「どうしてもそうやって、トラブルを抱え込んでしまっ。本当に、この街で生きていくのに向かない女だね、お前は」

克蘭クは泣きそうにも見えた。泣きそうな顔で、呟くように言った。カタリナはそんな克蘭クを、今初めて会った人の様に見た。

「この街で生きていくって事がどんな事か分かるか。自分以外の人間を気につけないことさ。自分の事だけを大事に考えるんだよ」

克蘭クは壁に手をついて言った。

「みんなそうして生きているんだ。そうでもしなきゃいつか命落とすからな」

「…わかってるよ。だけど良いんだ」

克蘭クはカタリナの顔を見た。カタリナの顔には、透明な微笑が浮かんでいた。いつもの作り物めいた笑顔だった。

「良いんだよ、私は」

「良くねえよ」

克蘭クはカタリナに噛付くように言った。カタリナは目を伏せただけだった。克蘭クはそんなカタリナを見て、諦めたようにうつむき、そして独り言のように言った。

「俺は、だから今の仕事についたんだ。こんな街でも誰かの事を気にかけることができるように、誰かを守れるようにな」

克蘭クは壁に拳を押しつけて、続けた。

「でも誰かを守るなんて、そんなの思いあがりだ。誰かを助ければ、必ず誰かの恨みを買う。そういう街なんだここは」

克蘭クは再び顔を上げて、続けた。

「いいか！誰かを守ろうとすれば、誰かの恨みを買うんだ！この街で生きるといふ事はそう言う事だ！人を助けるって事は決して綺麗事だけじゃないんだよ！それがわかっていて、どうしてお前はわざわざ厄介事に首を突っ込むんだ」

「お前と同じだからさ」

カタリナは静かに答えた。克蘭クははっとした様にカタリナの目を見た。

「…私も、誰かの事を気にかけてかったんだ」

克蘭クがカタリナの目をまっすぐに見た。その顔には、いつものように透明な無表情が浮かんでいた。しかしそれは、決して作り物めいてはいなかった。

「…俺と、同じ」

克蘭クが呟くと、カタリナは背を向けた。

「だけど私があの人を助けようと思ったのは、ただの感傷じゃない。いつかこんな日が来るのを、私は待っていたんだ」

カタリナの眼には意志が浮かんでいた。

「私は、ギノと戦わなきゃならない。ジーノの魂を鎮める為に」

「魂？」

カタリナの言葉に克蘭クの顔が強張った。

「じゃあ、ジーノは…」

克蘭クがカタリナの目を見ながら呟いた。

カタリナは、ジーノが戻って来た日の事を思い出していた。置手紙を残して、恐らくギノの所に行ったジーノが戻ってきたのは、いなくなっただけで一週間後だった。ただ、店にはなくて、再会できたのは警察署の遺体安置所だった。損傷から考えて、決して楽に死ねた訳では無さそうだったが、その顔はどこか安らかに見えた。

あの時からカタリナは、本当に一人になった。なぜか涙は出なかった。そして、あの日から一度も、カタリナは涙を流していない。

克蘭クはしばらくそんなカタリナを見た後、諦めた様に呟いた。

「なるほど、な」

克蘭クはそう呟き、しかしすぐに顔を上げて、続けた。

「だが勝算はあるのか」

「なければやらない。私はバノム街の薬師だ。街の誰もが恐れるような薬も持っている。それに『ファング』の事務所があるあのビルについては、連中より私は詳しいだろう。逃げるルートも確保してある。死角は無い筈だ」

そうは言ったが、カタリナの声は少しかすれていた。いくら調べ上げ、何度も頭の中でシミュレートしたとしても、カタリナは実際に戦闘をした事はなかった。実戦となれば想定外の事は無数に起るだろう。経験は人を強くするが、未知は恐怖を生む。その点は確かに心配だった。

だがそんな事はやるまで分からない。今日のこれは機会だ。そしてやるべき時だ。

そう心の中で自分を鼓舞するカタリナを、克蘭クはどこか見透かす様に、見下ろした。

「二人で勝てるか？」

「やってみなければ分からないだろう！勝てるさ！」

思いがけず、カタリナの口から大きな声が出た。その事にカタリナ自身が、一番驚いていた。克蘭クはしばらくカタリナを見下ろした後、静かに口を開いた。

「カタリナ。お前、俺を雇え」

「え？」

突然の提案に、カタリナの目が丸くなった。克蘭クはにやりと笑って、続けた。

「信頼と実績のガーディアン、この克蘭ク・スパイヤーを雇って言ってるんだよ。そうすりゃ多分、全員が生き残れる」

「だけど」

カタリナは薄く笑ってそう提案する克蘭クに、少し焦ったように言葉を返した。

「これは私の問題だし、それに」

「まだそんな事いつてんのか？」

克蘭クが言葉をさえぎる様に声を上げた。

「お前が死んじまったら多分あの娘もダメだろう？そうすりゃ誰が囚われの王子様を助けに行くんだ？それに俺だって新しいねぐらを探さなきゃならない。そんなんごめんだ」克蘭クはまくし立てた。カタリナは何も言い返せなかった。

「もうお前一人の問題じゃねーんだよ。それにこれはれつ

きとしたビジネスだ。俺はプロフェッショナルだからな。依頼されりゃ仕事はするぜ」

克蘭クの、自信に満ちた顔をカタリナは見ていた。どうしてここまで、克蘭クが自分に肩入れするのかわからなかった。だがやがて、決心したように静かに口を開いた。

「…依頼するよ」

「おう」

克蘭クは胸を張って、頷いた。そしてカタリナの次の言葉を待った。

カタリナはしばらく目を伏せ、そして、呟くように、言った。

「守ってくれるか」

カタリナの言葉は、静かにその小さな部屋に響いた。続けた。

「…私だけじゃなく、皆を、そして克蘭ク、お前自身も。全員の命、守ってくれるか」

カタリナの幽かな声が、もう一度闇に響いた。克蘭クが息をつくのが聞こえた。そしてやがて闇の中から呟く様に、

「…払うもん払ったらな」

克蘭クのかすれたような声が答えた。カタリナがポケットから銀貨を取り出し、言う。

「とりあえず、銀貨一枚でいいか」

「十分だ」

カタリナが弾いた銀貨を克蘭クは空中で受け取った。

カタリナは部屋に戻って行った。そしてエレノアに、最強の味方ができた事を伝えようと思った。

「Now's the time」

「俺が表から攻める。その間にあんた等は時間差で裏から侵入し、助け出す。どうだ？」

エレノアと克蘭クの、名前と味方である事だけを伝える自己紹介が終わると、作戦会議が始まった。店の奥の狭い部屋で、ベッドに広げたビルの見取り図を、三人は頭をつき合わせるようにして見ていた。そしてそれを見た克蘭クが作戦を話し出した。

ビルは三階建て。カタリナの調べでは地下室があり、そこ
の牢獄のような部屋にエレノアは捕らえられていたと言っ

恐らくはベイスもそこに捕らえられているだろう。それを想定しての作戦だ。

「俺にはこの頼れる相棒が二人もいるから、なんとかなるだろう」

クランクは自分の両手にはめられた『グローブ』を示しながら、言った。

『グローブ』とは手にはめ、呪印を刻む事で魔法を放つ武器の事だ。その種類ごとに使える魔法が違う。クランクは今、左手に閃光の、右手に爆発の呪文の掛かったグローブをそれぞれはめていた。更に腰にはスタン・ロッドが指しこまれていた。万全という訳だ。

しかし穴もあるように感じられる。カタリナは疑問を口にした。

「地下室にいなかった場合は？地上の階にいたと言う可能性もあるだろう？」

「だから俺は3階から攻める。あの辺りはビル街だから、隣のビルから進入できるはずだ。3階を制圧し、2階につながる階段の辺りで足を止めて撃ち合う。そうすれば、1階から侵入するあんたらと合わせて、全ての階に目が配れる。戦力も引き寄せられるしな」

「なるほど」

「だが長くは持たないだろう。だからある程度撃ち合ったら、俺は窓から逃げる。後は別々の逃走ルートを用意して、途中で落ち合う。いいか？」

「いいだろう。逃走ルートは私が用意してあるしな」

「それは？」

カタリナは地面を指差し、行った。

「地面の下を通っていくのさ」

「…地下道ね？」

エレノアが思い当たったと言うように、声をあげた。

「そう。あのビル街のそこかしこにはマンホールがあり、中は迷路の様で、知らない者は間違い無く迷う。あの道を自由に歩けるのは、野良猫の様な生活をしていた者だけだ」

「なるほど…。じゃあその入り口で落ち合えば…」

「簡単に追手は、まける」

「そりゃいいな。じゃあそのまま、港まで逃げちまおう。あそこから俺の知ってる奴の船が出る。俺の知りあいだといえは乗せてもらえるだろう。あとは何処かの街までそれに乗って行って、そこからさらに、その生まれた町まで逃げる…。完璧じゃねえか！」

クラंकが手を叩いて、言った。

「よし。それじゃあベイスさんの身も心配だし…」

「10分後に出発と行くか」

カタリナは頷くと、弾帯のようなベルトを肩から掛け、コートを上から着こんだ。そしてそのベルトから試験管を一本取り出すと、クラंकに手渡した。

「なんだこれ？」

「夜目が利くようになる薬だ。点眼して使う。侵入前に私は灯りを落す。お前は明かりが消えてパニックになったところを攻めて行け。これがあれば、一方的に攻撃できる」クラंकはカタリナのプランに納得したように頷くと、上を向いて薬を目に落とし、そしてエレノアに薬を渡そうとした。だがエレノアは首を振って、言った。

「エルフはもともと夜目が聞くんです…赤外線が見えるもので」

それを聞いてクラंकはカタリナに薬を返した。カタリナは慣れた動作で薬を目に落とし、平気な顔をして薬をベルトに戻した。

そして、工房の隅に目をやった。そこには昨夜の内に作っておいたあの薬が、『ソウル・オブ・ドラゴン』があった。『護身用にね』

昨日アインに言った言葉が、甦った。

カタリナは、一瞬躊躇した後それを手に取り、コートの内ポケットに入れた。

これで全て、揃った。

「それじゃ…」

エレノアが静かな声で言った。クラंकが真剣な目に戻り、呟いた。

「行くとするか」

「Body and Soul」

静かな霧雨の中、慎重に路地裏を伝っていき、なんとか誰にも会わずにファングのビルの隣のビルまで来れた。三人はここで最後の確認をしていた。

「途中マンホールがあったな？事が済んだらあそこで落ち合おう」

カタリナが押し殺した声で言った。二人が頷くと、更に続

けた。

「この後三分後に電火ランプの効果を一時的に殺すガスを噴霧する。そうすれば少なくともビルの中は真っ暗になるはずだ。それを確認して、克蘭ク、お前が三階から侵入してくれ」

「OK。そしてあんたらは随時折を見て裏口から侵入し、彼を助ける。俺は彼が見つかっても見つからなくても10分後には脱出する。だからそれまでに逃げてくれ。いいな？」

エレノアが頷いた。エレノアは緊張しているのか、口を開かない。だが呟くように、

「…生きて帰りましょう」

とだけ言った。三人は、顔を見合わせて、頷きあった。

そして克蘭クが踵を返した。4階へ上り、隣のビルに飛び移るために。

「克蘭ク！」

カタリナがその背中へ声をかけた。克蘭クがゆっくり、振り返った。

「気を抜くなよ」

カタリナの言葉に克蘭クは皮肉に笑い。

「誰にモノ言つてやがる」

と答えた。そして前に向き直ると、音も立てず、階段を素早く駆け上っていった。

カタリナ達も静かに、ビルの裏口に回った。今いるビルの裏口からファングのビルの裏へは路地を通つてすぐだからだ。慎重に裏口のドアを開ける。外では、降り止まない雨が静かに地面に落ちていた。エレノアをドアのところ以待機させ、注意しながらビルを出て、ファングのビルに向かう。

裏口が見えた。そしてその手前に小さな窓が見えた。窓は閉まっていたが、鍵が開いているのが見えた。カタリナは一瞬、逡巡した。そして迷つていても無駄だということに気づくと、手を伸ばしてその小さな窓を、出きるだけ音を立てないように開けた。

すばやく物陰に隠れる。しかし中からは、なんの反応も返つて来なかった。

ついでにカタリナは体を起こすと、窓に駆け寄った。そしてベルトから大きめの黒い試験管を三本取り出すと、その蓋を全て外して、窓から投げ入れた。

窓の中、壁の向こうで幽かな音とともに中の液体が、猛烈

な勢いでガスに替わって行くのが聞こえた。そしてしばらくすると、出し抜けに窓から零れる光が消えた。続いて、2階の、そして3階の窓の光も消えた。中から僅かにざわめきが聞こえてきた。カタリナは隣のビルの裏口まで戻り、中に入った。

中で待っていたエレノアが、

「どうだったの!?」と、興奮したように聞いて来た。

「成功、です」

背中に冷たい汗を感じながら、カタリナは答えた。そして煙草を取り出し、火をつけた。

魔力の幽かに香る煙を吐き出し、カタリナは待った。この日のために吸いつづけてきた煙草。その煙を吸いこみながら、待った。

すぐに隣のビルの、上の方から何かくぐもった、爆発音のようなものが聞こえてきた。

始まったのだ。

二人の女は、顔を見合わせると、裏口から外に出た。雨の中、三階の窓を見上げる。窓が光ると、爆発音が聞こえるのがほぼ同時だった。さらに二度三度と、爆発音が響く。

「行きましよう！」

カタリナが煙草を投げ捨て、叫んだ。ファングのビルの裏口に飛びついた。ドアノブをひねるが、鍵が掛かっている回らなかった。

予想していた事だ。カタリナはベルトから紫色の試験管を取り出すと、中身をドアの蝶番に振り掛けた。一瞬後に、見る見る蝶番が錆びて腐っていく。しばらく後カタリナが肘で突くと、音もなくドアが壁から外れた。静かにドアの脇の壁に外れたドアを立て掛ける。エレノアに一瞥を奥つて、ドアのあった空間からビルに侵入した。

中は粘るつくような闇で、だが二人の目には昼間のように良く見えた。中に入ると目の前はすぐ壁で、右に廊下が伸びていた。上の方から怒号が聞こえる。躊躇なくカタリナは右に歩き出す。その後ろをエレノアが背中を守るようにしてついて来る。地下室はこの廊下の先、角を二度左に曲がった先にあるドアを開ければ行けるはずだ。

最初の曲がり角。カタリナは慎重に角から顔を出し、角の向こうを覗き込んだ。

そこには左にドアがついた廊下があるだけで、人の姿は無かった。冷たい汗がカタリナの背中を流れる。カタリナは息をつき、次の曲がり角に向かって音も立てず歩き出した。

その時角から男が姿を現した。
カタリナの心臓が跳ねあがった。

「エリオか…？」

犬のような顔をした獣人が、一瞬身をすくませながら、カタリナ達の前で眩いた。闇の中眼を凝らすようにカタリナ達を見つめ、そしてすぐにそれが侵入者である事に気付いた。

男は何か声を上げようとするように、息を吸った。そして、声は上げず、グローブをつけた右手をカタリナに向けようとした。

一瞬早く、抜き出した青い試験管をカタリナが男に向けて投げつけていた。試験管は一直線に男の胸元に飛んでいき、そこで碎けた。

同時に爆ぜるような音と共に、閃光が男の胸元を中心に閃いた。閉じ込められた雷の精霊が目を覚ます。ミニサイズの稲妻が男の体を駆け巡った。

「か」と言葉にならない息を喉の奥から搾り出し、男は踊るように体を痙攣させ、そしてゆっくりと崩れるように倒れた。

カタリナは、倒れてなお痙攣している男の姿を見下ろし、激しく息を吐いた。まだ動悸が収まらなかった。

何度も練習した動作だった。しかし実戦でこうもスムーズに体が動くとは思っていなかった。自分が今戦場にいるという事、そしてそれに対応できたという事、その事実をカタリナは噛み締めた。

やれる…！カタリナは右の拳をぎゅっと握った。そして懐に手をやった。コートの内ポケット、手を伸ばせばいつでも届くところに、あの薬もあった。

最後には、これを使えばなんとかなる…！その思いが、カタリナの心に僅かな心強さを与えてくれていた。カタリナはエレノアに向き直った。そして目を丸くしているエレノアに頷いて見せた。エレノアも、息をつくくと、頷き返した。

カタリナは男に駆け寄り、グローブを剥ぎ取った。それをエレノアに渡す。

「使えますか？」

「なんとか…」

エレノアはグローブをはめながら、頷いた。他の多くのバノム街の住人同様、どこで覚えたのか、攻撃用の呪印を刻む仕草をして見せた。カタリナはそれを見て頷いた。

再び前進が始まった。断続的に爆発音が聞こえる中、カタ

リナは静かに角に忍び寄り、覗き込む。突き当たりに右への曲がり角があり、廊下の途中にドアが見えた。そのドアの向こうが階段で、地下室に続いている筈だ。

カタリナはエレノアに目配せすると、ドアに駆け寄った。また鍵が閉まっているかと思ったが、ドアノブを捻ると、それはなんの抵抗も無く回った。

しめた！エレノアに目配せをしようとカタリナはエレノアに首を傾けた。その時エレノアの押し殺した叫びが闇に響いた。

「カタリナさん！」

瞬間エレノアの手が伸び、カタリナを力一杯引き寄せた。

一瞬送れて、さっきまでカタリナがいたドアの前を閃光が吹き抜けた。ドアの脇の壁にそれは無数の穴を穿った。

危なかった！カタリナは胸をなでおろす間もなく、閃光が飛んで来た方、突き当たりの角に目を向けた。角に隠れて、男がグローブを自分に向けよつとしてるのが見えた。呪印を刻んでいる間にカタリナは身を翻し、試験管の中身を男に向けてぶちまけた。男は呪印を刻むのを止め、腕で顔をカバーしようとした。そして顔をカバーするには成功したが、腕を中心に地面まで広がった電撃に耐える事はできなかった。男は電撃のショックで踊るようなしぐさを見せ、それが止むとその場に音もなくくず折れた。

カタリナが安堵のため息をつくと、背後でドアが開く音が聞こえるのが同時だった。カタリナが振り向くと、自分に向けて地下室に続くドアが勢い良く開けられるのが見えた。ドアに跳ね飛ばされ、あどろさるカタリナの目に、ドアの向こうで目を見開いているエレノアの姿が見えた。さらにドアが開かれ、その向こうに男が現れた。狭い廊下で男とエレノアが至近距離で対峙した。

「エレノアさん！」

カタリナが思わず声を上げた時、一瞬男の注意がそれた。そして男が視線をエレノアに戻す前に、エレノアの体当たりが男の体を跳ね飛ばしていた。

けたたましく転がり落ちる音と、叫び声が急速にフェードアウトしていった。カタリナが駆け寄ると、ドアのすぐ先にある階段の向こうで伸びている男が見えた。

カタリナはエレノアに向けて顔を向けると、エレノアは肩で息をしながら、「やったわ……」と眩き、片頬で笑って見せた。カタリナも笑みを返し、そして地下室へ続く階段を静かに下りていった。

階段を降り切ると湿っぽい地下の空気が頬に触れた。地下室は狭く、部屋の向こうには鉄格子がある。そしてその向こうに倒れている人影が見えた。

「ベイス！」

エレノアが声を上げた。やっぱり地下室にいた…！カタリナはクラランクの予想が当たった事に感謝し、同時に鍵がどこにあるのか探した。すぐに、先程階段から落ちた男の腰に鍵束が付いているのが見えた。駆け寄り、鍵束を剥ぎ取って手当たり次第に牢の鍵に差し込む。四本目で、鍵は回った。冷たい音と共に鍵が外れた。エレノアが鉄格子を開けてベイスに駆け寄り、そしてその目を見開いた。

「あ、ああ、こんな…」

カタリナも駆け寄ってベイスの体を見る。その青い服に見覚えがあった。一昨日の夜見た、肌の白い男だった。が、その肌は今ほ酷く傷つけられ、床には血痕が飛び散っている。

「なんて事を…」

エレノアがその体を抱き起こした。ベイスは幽かにつめいたが、しかし無意識につめくだけで、その目は開かれなかった。

カタリナはその傷が動けないほど重度のものであることを見て取った。そして一瞬考えた。傷薬はあるが、使っている時間はない。だが女二人で大の男を抱えて逃げる。それはさっきまでの上の状況を見る限り、不可能だろう。ベイスには自分の足で帰ってもらわなければ、誰も生きては帰れない…。

となれば、道は一つ。

カタリナはベイスの傍らにしゃがみこみ、その手をかざした。そして全身に広がる傷を、その手に感じる「気」で探った。その様子をエレノアが不思議そうに見ていた。

傷薬で時間を掛けて悠長に治している暇は無い。

カタリナの手がベイスに触れる。そして全身の魔力をベイスの体に送る。カタリナの手が、そして体が鈍く光り出した。

ならば、傷薬の治癒の成分を、直接ベイスの体に生成する…！

常識的にはそんな方法は生成者のカタリナ自身の魔力が持たない。だが他に方法もない。

光がベイスの体移り出した。カタリナの額に汗が滲む。気を失いそうになるのを精神力で繋ぎとめる。目を閉じ、全

身の魔力を集中して、治癒の力をベイスの体に生み出す…。カタリナは長く息を吸いこみ、そして眼を見開いた。

その瞬間、風が吹きぬけた。

やがて、ベイスがゆっくりと目を開ける。その肌にはもう、傷は残ってなかった。

しばらくぼうつとしたように辺りを見回し、そして目の前にあるのがエレノアの顔だと気付くと、「ここは…？天国か？」と呟いた。エレノアはベイスの体に抱きついた。そして、

「違うわよ！この人が、カタリナさんが助けてくれたのよ！」

涙で潤んだ目をベイスに向け、言った。ベイスはゆっくりと顔をカタリナに振り向けた。そしてそこにいるのが、昨日自分に薬を売ってくれた女だと気付き、目を丸くした。

「あんたが…？なんで一体…？」

「説明は後です。ここはキノのビルで、逃げ出さなきゃなりません。歩けますね？」

ベイスは頷き、立ち上がった。足取りが少しふらつくようだが、「…ああ、大丈夫だ」と言った。カタリナも頷き、立ち上がった。

その時、カタリナは少し自分もふらつくのを感じた。

嫌な汗が背中を伝った。魔力を使い過ぎたか…！思ったが、思っただけだった。カタリナは首を振ると、ベイスに歩み寄った。そしてその目に有無を言わず目薬を差し、「暗闇で物が見える薬です」と簡潔に説明した。ベイスは目をしばたきながら、「寝起きにこれは少しキツイな…」と軽口を叩いた。ベイスが元気を取り戻したのを感じ、二人の女は顔を見合わせて幽かに笑った。

そして三人で階段を上り出した。先頭のカタリナが、ドアから廊下に出るとき、左右を見まわした。さっき倒した男が先ほどと変わらない格好で倒れているだけだった。動く者の姿は見えない。カタリナは息をつき、そして後ろの二人に、五本指を立てる仕草をした。二人はそれだけで理解したようだった。カタリナが指を一本ずつ倒して行く。そして全ての指を倒すと同時に、三人は走り出した。

途中倒れている獣人の男の体を飛び越えて、廊下を走った。角を二度曲がり、壁にぼっかりと口を開けた出口が見えた。カタリナは転がり出るように出口から外へ出た。さらにベイス、そしてエレノアが続く。

脱出できた！カタリナは振り返った。エレノアが拳をカタ

リナに突き出している。この路地を伝っていけばマンホールに行き当たる。そこから地下道に下り、曲りくねった迷路を行けば港だ！そこまで行けば私達の勝ちだ！

その時、頭上でガラスの割れる音がした。

カタリナが振り返ると、ビルの上階の窓が割れて、そこから人影が飛び出してきた。一瞬見をすくませるも、すぐにそれがクランクだとわかった。カタリナは身を強張らせているベイスに「味方です！」と教えた。クランクは雨でぬかるんだ地面にしっかりと着地し、カタリナ達の姿をみとめると、叫んだ。

「いいタイミングだな…行くぞ！」

しんがりにクランクがつき、細い路地を再び走り出した。すぐにマンホールが見えた。あらかじめ外しかけておいた蓋を蹴り飛ばし、エレノアとベイスを先に降りさせた。そして自分も降り、最後にクランクが地下道に降り立つと同時に、「こつちだ！」と叫んでカタリナは走り出した。粘るような闇の中走りつづける四人。やがてクランクがカタリナに追いつき、「成功か？」と尋ねてきた。カタリナは荒い息を抑えて、答えた。

「ああ！お前は！？」

「ま、多少傷は負ったがな、訓練もされてない相手だ。概ね完勝だよ。かなりの数を倒せたしな。ただ…」

そこまで喋ってクランクは顔をしかめ、そして続けた。

「ギノの野郎は、確認できなかつたな…。生きてるかどうかわからねえ。多分あのドンパチだ。死んだとは思って…」それを聞いてカタリナの顔が強張った。エレノア達を振り返る。二人は寄り添うように走っていた。その姿を見て、その事を伝えるのはよそうと思った。あとは港まで走っていけば、少なくともあの二人は助かる。いたずらに不安を煽ってもしょうがない。そう決めたカタリナは無言で走りつづけた。

何度も何度も分岐路に突き当たり、その度に躊躇なくカタリナは道を選んできた。皆それに、黙って従った。皆の息が切れ、そしてもう、どちらを向いて走っているのか分からなくなつた頃、カタリナが顔を上げた。

「あれだ！」

地下道が尽きるどころ、そのどん詰まりにまっすぐ上に伸びるはしごが見えた。

クランクがはしごに飛びつき、一瞬で上まで登り、そして「ふん！」と力をこめて蓋を押し上げた。そして地上に出

た。カタリナは一人に頷きかけ、それでまずエレノアが上つていった。そしてベイスが、最後にカタリナが、雨の止まない地上に向けて上つていった。

カタリナがマンホールから顔を出した瞬間、潮の香りがカタリナの鼻をくすぐった。汽笛の音が聞こえた。回りを見渡すと倉庫が、そしてその反対側には海が広がっていた。港だった。クランクが肩で息をしながら、埠頭に着いている、小ぶりの船を指差した。

「あれが俺の知り合いの船だ。乗ってりゃ追手もごまかせるし、あれに乗っていきゃあ、キャラドあたりまでは運んでもらえる。そこからはどこへでも逃げられるだろう」

そうエレノア達に言った。エレノアは息を切らせながら、涙で潤んだ顔をクランクに向けて、何か言おうとした。しかし感謝の言葉も出て来ない様子だった。クランクはそんな二人に、にっかりとわらって見せ、

「さあ、雨で体が冷えちまう。早く船に乗りな」

と言った。それを聞いて、エレノアも、無理に笑って見せた。

「あ、ありが…」

と呟き、そして、目を見開いた。

見るとベイスも目を皿のようにして、クランクの肩の向こうを見ている。カタリナの背筋に寒気のようなものが走った。

クランクとカタリナは振り向き、そして二人の視線に何が映っているのかを知った。

ギノだった。

「LIFE」

ギノはニヤニヤと笑いながらこちらに向けて歩いてきた。ベイスが体を硬くしてその姿を見ていた。カタリナの手に汗が滲む。ここまで来て…！カタリナは顔をしかめた。先ほどから感じている膝の震えは、疲労と、魔力の使い過ぎのせいばかりではなさそうだった。

「ギノ…貴様なんでここに」

ベイスが搾り出すように言った。

「よう。どうせ女がお前を取り返して逃げるだろと思って

な、張らせといたんだよ」

ギノはカタリナ達の前、きっかり3mの距離を残して、止まった。

「自分の組員がボロボロにされても気にしねえでか？」

克蘭クが静かに聞いた。ギノは鼻で笑いながら、答えた。「組員？ああ、あの駒どもの事か？ハナクソ程も気にならねえな。あんなボンクラども、この街じゃあいくらでも補充できる」

その感情を持たない乾いた声に、ベイスが奥歯を噛んで、搾り出す様に言った。

「クズ野郎が…！悪党にも仁義ってモンがあるだろうが！」

ギノはその言葉にますます笑みを広げた。

「下らねえな、元舎弟クンよオ！俺が興味があるのはな、金と、力と、そして俺に刃向かう奴をこの手で捻り潰す事だけだよ！」

ギノが耳まで裂けた口から牙を除かせて喚いた。そして右手を握り締め、静かに言った。

「…こんな風にな！」

風が吹きぬけたように感じた。ベイスの体が弾け飛んだ。ギノが一瞬で間合いを詰め、ベイスを横様に殴りつけたのだ！

克蘭クがその背中に左の爆撃のグローブを向け、呪印を刻みかける。だが振り向きざまにギノの鋭い爪が閃き、克蘭クのグローブと手が裂けた。同時に克蘭クの右手を掴み、その手からグローブを剥ぎ取り、にやりと笑ってそれを懐に突っ込んだ。

「ち！」

克蘭クが裂けたグローブからにじみ出る血をギノの目に飛ばした。事も無げに避けるギノ。だが同時に克蘭クは腰に差したスタンロッドを抜き出し、ギノのこめかみに向けて殴りつけた。鈍い音が響いた。同時にロッドが一瞬光り、麻痺の魔法が発動した。

ギノは、その姿勢のまま固まった様に動かなくなった。克蘭クの顔に笑みが浮かびかけたその時だった。ギノの裏拳が克蘭クを弾き飛ばした。

4m程飛ばされ、しかし倒れなかった克蘭クは、脳が揺れているのか、覚束ない足取りで立ち、どこか虚ろな目でギノを見た。

「テメ、なんで…」

「俺にちよつとやそつとの魔法は効かねえよ、坊主」

ギノは殴られたこめかみの辺りをさすりながら、にやりと笑って言った。

瞬間、カタリナの投げた試験管が宙を舞い、ギノの背中に叩きつけられた。ほぼ同時に、エレノアのグローブから発せられた閃光がギノの背中では炸裂し、弾ける様に閃光が瞬いた。

「ぬ……ぐ」

閃光と電撃の二重奏を受けたギノは、しかしうめいただけだった。そしてゆっくりと女達の方を振り返り、「お前等は後でたっぷり可愛がってやるからな、待ってる」と笑った。エレノアが身をすくませる。その眼はなんの感情も持たない、冷血動物のそれだった。克蘭クが履き捨てる様に言った。

「魔法が効かねえだと……無神経な野郎だ」

「俺の体は特別製なのさ。昔街のヤミ魔導師に莫大な金と引き換えに体をいじってもらつてな。バツクも何も持たない俺がのし上がったのは、この体と、この拳の力だ」

ギノは両の拳を打ちつけながら、言った。そして起きあがるうとするベイスと、克蘭クに視線を配りながら、続けた。

「お前らも男なら、魔法に頼らず自分のカラダで来な。ただし……」

ギノはそこまで言って、克蘭クまで一瞬で間合いを詰め、蹴り飛ばし、そして叫んだ。

「人間が獣人に勝てるのならな！」

起きあがったベイスが飛びかかり、拳をその背中にめり込ませた。しかし同時に飛んできた尻尾になぎ払われ、さつきまでいたところより遠くに飛ばされた。

克蘭クがロッドを手に飛びかかる。脳天にロッドを叩きつけ、同時に蹴りがギノの脇腹を捉える。ギノは一瞬顔をしかめたが、すぐに口を大きく開け、牙を剥いて克蘭クに襲い掛かった。克蘭クは戦慄に満ちた顔で身を捻り、すんでの所でその鋭い牙を逃れた。ギノは間髪入れず克蘭クの腹に右拳を叩き込み、返す左で横顔を殴りつける。克蘭クは口から血を飛び散らせ、あとずさった。間合いをつめようとするギノが、何かにつつかえたように足を止める。ギノは、足元にベイスがしがみついているのを見て、忌々しそうに振りほどき、蹴り飛ばした。

その様子を、カタリナとエレノアはなすすべもなく見てい

た。注意の逸れたギノを克蘭クが逆手に持ったロッドで殴りつける。ギノの反撃の拳をかわして懐に潜り込み、ボディに連続で、数え切れない程のコンビネーションを決める。しかしギノは鉄槌のような前腕でその背中を殴り、膝蹴りで跳ね飛ばした。吹き飛び、地面を一回転して起ち上がる克蘭ク。苦しそうに息をする克蘭クの前で、ベイスがギノの後頭部に蹴りを見舞っていた。

雨の中、三人の男は殴り合っていた。それは、きわめて原始的で、そしてシンプルな、「殺し合い」だった。それに加われない無力を感じながら、カタリナはそこに佇んでいた。ベイスが5mも投げ飛ばされる。克蘭クが顔面にギノの岩のような拳を受け、弾けたように飛ぶ。しかしそれでも、倒れなかった。

「しぶといな…。人間にしちゃあ頑張るじゃねえか」

ギノが肩で息をしながら、呟いた。さすがのギノも無事ではなく、足取りが僅かに狂っていた。が、克蘭クやベイスよりは遥かに余裕があるようだった。

「理解できねえな。絶対に勝てねえだろう相手に、向かっていくその理由はなんだ？命がいらねえほど頭が弱えからか？」

ギノの言葉に、克蘭クの動きが止まった。顔を伏せ、そしてやがて、静かに呟いた。

「…2度失った、命だからな」

その言葉に、ギノの眉がピクリと動いた。カタリナも思った。どう言う事だ？

克蘭クは地面を見たまま話し出した。

「…もう10年も前になる。ある日、下らねえマフィアの抗争に巻き込まれた俺は、半分死んだ体で燃える自分の住処を見ていた。姉貴は俺をかばうようにして倒れていた。俺は痛みと恐怖と、絶望的な怪我で、少しも動けなかった。

警察は来ない。姉貴の体は冷たくなっていく。俺は泣いてそこで誰かが助けてくれるのを待つだけの、弱いガキだった」

克蘭クは目を伏せて、続けた。

「そこに現れた薬師が、抗争の中何も言わず俺と姉貴を診てくれた。姉貴は手遅れだったが、俺は奇跡的に、命を助けられたんだ」

カタリナが眼を見開いた。克蘭クの言葉が心を揺さぶった。その医者はい？

「俺は姉貴の亡骸を埋葬し、その墓前に誓った。あの名も

名乗らず消えた医者のような、強くて大きな男になるってな…！」

カタリナの目が、唇が、震えていた。

「あれから10年、俺は再び命をある女に救われた。そしてやがて分かった。その女こそが、俺を救ったあの薬師の忘れ形見だ！」

克蘭クは顔を上げ、ギノの眼を正面から睨みつけた。

「だから俺は、その女のためにも負けられねえんだ！2度死んだはずの俺がここに生きている、その意味があるのなら、この命は闘うためにあるんだろっからな！」

克蘭クはギノを睨みつけ、傷だらけの体でまっすぐに立って、言った。カタリナの感情はもう少しで零れ落ちるところだった。だけど奥歯を噛んで、こらえた。

ギノは皮肉に笑い、克蘭クを睨み返した。

「面白え昔話だったぜ、若造…」

ギノが間合いを詰めて、殴りつけた。克蘭クは倒れなかった。

その時、カタリナの心が決まった。懐から昨夜作った薬の入ってる小瓶を取り出した。

『一歩間違えばお前の身も滅ぼす事になる』アインの言葉が甦る。しかし今使わなければいつ使う？克蘭クもベイスマも戦っている。私だけここで見ている訳には行かない！小瓶の蓋を開け、中身を喉に流し込んだ。瞬間、強烈な熱さがカタリナの喉から胃にかけてを焼いた。カタリナはその場に崩れ落ちた。エレノアがカタリナの異変に気付き、心配そうにカタリナを覗き込んだ。

この苦しみに耐えれば！カタリナは唇を噛んで耐えた。即効性のその薬は、すぐにカタリナの体の中で作用するはずだった。

しかし。

やがてその熱さは、収まってきた。そして何の変化も、カタリナの体には現れなかった。

どうして！？カタリナは狼狽した。そしてすぐに思い当たった。自分の体には、もうその薬の効果を顕す程の魔力も無いと言う事に。カタリナは体から力が抜けていくのを感じた。

…なんてこと…！

カタリナは声にならない声で呟いた。最後の切り札が、ここに来てブラフに過ぎなかった事を自分で思い知らされた

のだ。カタリナの体は悔しさと無力感で脱力した。胃にはまだ、さっきの薬が作用しようとして発熱しているのが感じられる。しかし当のカタリナの体は、魔力は、その薬について行けないほど疲弊していたのだ。

カタリナは絶望的な気持ちで顔を上げた。ギノが克蘭クに向けて構えるのが見えた。そして肩で息をしながら、言った。

「…だがもう飽きた。終わりにしようぜ」

それと、克蘭クがロッドを構えて駆け出すのが同時だった。

肩口からギノの頸椎を狙って、ロッドが閃いた。それは神速に近い速さだった。風を切り裂く音に続き、夜の港に鈍い音が響いた。

しかし、それはギノの首を捕らえてなかった。腕で受けられていたのだ。ギノがにやりと笑う。逆の手が、克蘭クの腹を捉え、克蘭クの体が一瞬くの字になって宙に浮く。ギノが間合いを詰めようとしたその時、しかし何かにぶつかる様にその体がつんのめった。

ベイスだった。ベイスが背中にしがみついていたのだ。ギノは腕を押さえられ、振りほどこうとしても振りほどけないようだった。克蘭クが顔を上げた。

「バカが！」

ギノが叫んで口を大きく開けた。瞬間、ざくりという音と共にベイスの腕から鮮血が霧のように舞った。うめいて手を離すベイス。ギノの牙から、ベイスの血が滴るのが見えた。

「てめーもだ…！」

ギノが克蘭クを睨みつけ、そしてその口を大きく開け、跳びかかった。牙が不吉に光り、ギノが吼えた。

「死ね！」

「克蘭ク！」

カタリナが叫んだ。同時に克蘭クがギノに向けて一歩踏み込むのが見えた。

「…それを、待ってたんだよ！」

克蘭クが、ロッドをギノの口めがけて叩きこんだ。

ギノの眼が見開かれ、口を閉じようとする前に、ロッドがギノの口に吸い込まれた。

ぐしゃっと、何かが潰れるような音がした。

数瞬の間、克蘭クがロッドを引き抜くと、ギノの口から夥しい血が吹き出された。

「……………！！」

ギノが声にならない叫びを上げ、後ろに仰け反った。同時に、クランクとベイスが拳を振りかぶり、そして叫んだ。

「おおおおおお！！」

そして二人同時に、その体に懇親の力をこめた突きを叩き込んだ。

ギノの巨体は、ゆっくりと弧を描くように倒れていき、そして、地響きを立てて地面に倒れ伏した。

倒れ様ギノは先程奪ったグローブを取り出そうと懐に右手を入れようとしたが、即座にクランクがその体に素早く駆け寄り、右肘を踏み砕いた。同時にベイスが左膝を踏み割った。ギノの喉の奥から短く息が漏れた。

ギノは上体を起こそうとし、しかしかなわず、やがて力尽きた様に、地面に崩れ落ちた。

その時、ずっとバノム街を洗っていた雨が不意に止んだ。

そして、やがてベイスが握り拳を天に突き上げ、クランクが誰にともなく静かに呟いた。

「…終わったぜ」

女達はその声に我に帰った様な顔をした。そして、ギノの所まで歩いていった。

「ギノ…」

カタリナが、倒れているギノを見下ろし、静かに呟いた。

ギノがその顔を睨みつけた。

「クソツタレ。まさかこんな結果になるとはな…！！」

ギノはカタリナを見上げ引き絞るように呟いた。その眼には怒りと憎悪が、そしてそれに準ずるあらゆる負の感情が渦巻いていた。

「殺せよ」

ギノが呟いた。カタリナはその言葉を聞いて身を一瞬、震わせた。ギノは続けた。

「分かっただろ？俺を生かしておくとお前等は死ぬより辛い目にあうぞ。生まれてこなければ良かったと思うほどにな」

ギノの言葉に、その場の誰もが沈黙した。月明かりのなか、無言のまま時が過ぎた。

やがてカタリナは懐から小さなナイフを取り出した。クランクが左手で制しようとしたが、カタリナはその手を払いのけた。ギノの眼がにやりと笑ったように見えた。

カタリナは刃をギノに向けたまま、しばらくそのままだった。そして幽かな声で呟いた。

「…殺したのは、お前だな」
「なに？」

「ジーノを、殺したのは、お前だな」

その言葉にギノは、一瞬その表情を緩めた。

そして、やがてギノの口元が笑いの形に歪められた。口元から笑い声が漏れた。いつもの、あの不愉快な笑みだった。

「へっへっへ、へへへ…」

ギノは始め含み笑いのように笑っていたが、やがて寝たまま、胸をそらして笑い出した。

「何がおかしい！」

カタリナがナイフを突き付け、叫んだ。ギノは笑いをこらえ、言った。

「へへへ、カタリナあ、お前と俺の間にはずっと長い事誤解があつたようだな…！」

「何！？」

カタリナの表情がこわばった。

「奴を殺したのは俺じゃないぜ。ククク、ずっと誤解されていたみたいだがなあ」

ギノは笑いながら言った。しかし、嘘を言っている風ではなかった。

カタリナの頭は急激に混乱した。

ずっと仇だと思っていた奴が、実は違っていた！？誰か別に犯人がいるって事！？

では誰が！？

その時カタリナの心に衝撃が走った。ここにいるべき人間が一人いないことに気付いた。

背筋を寒気が走りぬけた。手に汗が滲む。あいつがいない。

あいつがここにいないと言う事は…！

逡巡するカタリナにギノが口を聞いた。

「教えて欲しいか、お前のジーノを殺した奴はなあ…」

その瞬間、鋭い閃光の束がカタリナ達を襲った。

「Lady Be Good」

まずクラシクが足を貫かれ声も無くその場に崩れ落ちた。

同時にベイスが弾け飛んだ。カタリナも、肩を閃光が貫き、

僅かに遅れて焼け付くような熱さと痛みが襲ってきた。倒

れこむカタリナの目に、同じく肩を貫かれ倒れこむエレノ

アの姿が見えた。カタリナは倒れ込み、閃光が飛んできた方向を振り向いた。

そこにそいつはいた。

ニヤニヤと、ギノと同じ笑みを浮かべていた。スーツを着込み、右手にグローブをつけた、全身黒の鱗に覆われたリザードマンが、ゆっくりとカタリナ達の方に近付いてきた。

「遅かったじゃねえか、スピノザ」

ギノがその、自分の一番の舎弟に、上体を起こして声をかけた。その場の全員の視線の中、スピノザは満足げに笑うと、カタリナ達から10m程離れて止まり、地面に倒れた四人とギノの前に誇らしげに立ちはだかった。

「スピノザ…！」

ベイスが荒い息をしながら憎々しげに呟いた。スピノザはかつての仲間を冷ややかな眼で見ると、にやりと笑って唾を吐いた。

「いいだろ、これ？レイグル社の新商品の試作品だ。T3 1ツールハンマーつってな。簡略化された呪印を刻むだけで、貫通力のスゲエ高い閃光を束で撃ち出す事が出来んだ」笑みを浮かべながら、スピノザが自慢げに右手の『ツールハンマー』をひけらかした。

エレノアがグローブをスピノザに向けた。そして呪印を刻むより一瞬早く、スピノザの放った閃光がエレノアの手を貫いた。

「く！」

エレノアの手から赤い血が幾筋も流れ、ぐったりと力なく地面に落ちた。

「まあ、全てうまくはいかねえのさ」

ギノは上体を起こし、カタリナ達に言い放った。そしてスピノザに向けて、言った。

「やれスピノザ」

エレノアが目を瞑った。カタリナはギノの眼を睨みつけた。

スピノザはニヤニヤと笑うと、右手を動かし、そして…

ギノに向けた。

そこにいる全員が目を見開いた。

「な…」

ギノは顔を強張らせて、一番の舎弟の方に顔は動かさず眼だけを向けた。

「…貴様なんのつもり」

ギノが言い終わらない内に、スピノザのグローブが瞬いた。

ギノの屈強な体でもその閃光の束には耐えられず、腹には

無数の穴が開いた。鮮血が幾筋も吹き出した。

ギノはその驚愕の表情のまま倒れこんだ。血を吐き、体を起こそうとしながらうめいた。

「なんで貴様が…」

「邪魔クサいんだよアンタ」

「バカが…俺がいなければ、あんな組あっさり潰されちまうのがわからねえのか…！」

「俺がいりや大丈夫さ」

スピノザは冷ややかに言っただけ、さらに倒れたギノに閃光を撃ちこんだ。ギノは胸を連続で撃ちぬかれ、地面に叩きつけられて半回転した。そして身を震わせ、声もなく動きを止めた。スピノザは満足げに深呼吸すると、ついと右手をカタリナ達の方に向けた。

「ちよつど良かった。いい機会をくれてな。礼を言っぜクソ女」

「どういう事だスピノザ…！」

ベイスがスピノザの言葉に声を上げた。スピノザはニヤニヤと笑いながら話しだした。

「気に食わなかったんだあの野郎は。だがドサクサに紛れて消すチャンスなんてそうそう無い。俺はずっと待った。そこによつやく、今日のこの騒ぎだ」

カタリナはグロープの向こう、スピノザの眼を見ていた。闇夜に浮かぶその眼はなんの温かみも持たない、爬虫類の眼だった。スピノザはギノを一瞬だけ見下ろして、続けた。

「ここでこいつを殺って、お前等も消せば、俺のやつたことは誰にもわからねえ。まあこいつは力も持っていたが、同時に嫌われ者だった。ちよつどいいだろうつよ」

スピノザは殊更満足げににやけて言った。

「これが締めくくりさ。お前等をバラして一見落着だ。命乞いでもするか？」

カタリナは一言も喋らず、スピノザの眼を睨みつけていた。スピノザはその眼に少しおののいたように、息を飲んだ。

「命乞いは無しか…強情な女だな」

そこまで言っただけスピノザは何かを思い出したような顔をして、さらに口を歪めた。

「…そつういやあ、大分昔にも似たような事があつたなあ」

「なに？」

カタリナが聞き返した。スピノザは余裕を含んだ声で続けた。

「あれは俺が組に入ったばつかの頃だつてかな、ちよいと

気にくわねえ街の薬屋が、組の薬を作るのをゴネた事があってな」

カタリナの目が見開かれた。

「そのときちよつと強く頼みすぎて殺しちまった時があつたなあ。そいつも最後までそんな眼をしていたっけな」

カタリナは自分の毛が逆立つような気がした。そして搾り出すように呟いた。

「お前が…やったのか…」

「あ？」

カタリナはかつと顔を上げた。

「お前がジーノを殺したのか!!」

カタリナの叫びが夜の港に響いた。

スピノザはニヤニヤと笑みを口の端にこびりつかせて、答えた。

「ジーノって言ったけか？あいつも強情だったなあ、お前を拾った親父だったよな。ちっこい女拾って何する気だったんだかな。とんだ変態親父だったんじゃねえのか？」

スピノザの吐き散らした言葉に、カタリナは全身の血が頭に上るのを感じた。

肩がわなわなと震えた。心臓の音が自分で聞こえるほど強くなつていく。カタリナは目を伏せた。熱くなる体と裏腹に、精神は冷たく、鋭く研ぎ澄まされていくのを感じた。

「まあ、心配しなくてもすぐに同じ所に送ってやるよ、皆揃つてあの世で馴れ合つてろ」

スピノザが手を伸ばし、呪印を刻んだ。

「じゃあな、クソ女」

一瞬、一際大きな閃光がカタリナに向けて閃いた。クラックが叫んだ。

「カタリナ！」

閃光はカタリナに向けて夜の闇を切り裂いて飛んだ。しかし。

閃光はカタリナの胸の辺りで弾け、そして瞬き、かき消えた。

カタリナは、視線を落としたままピクリとも動かなかった。「なに？」

スピノザが驚愕の表情と共に目を見開いた。すぐに第二、第三の閃光の束を撃ち出す。

カタリナは掌でそれを受けとめ、弾き飛ばした。

胃の中で、消えかけていた熱さが蘇るのを感じる。魔法の薬が、体の隅々まで駆け巡る。疲弊しきつたカタリナの体

に新たな力が満ちるのを感じ取ったその薬は、カタリナの体のあり方を急激に変化させていく…！

スピノザの眼に恐怖の色が浮かんだ。カタリナが奈落の底から湧き上るような声で呟く。

「スピノザ」

スピノザがびくりと体を震わせた。もうカタリナの声ではなかった。牙が伸び、角が生え、白い陶器のような顔は金属にも似た光沢を帯び始める。

髪の毛は尖り、逆立ち、鈍い光さえ帯び始める。筋肉が隆起し、爪が生え、鱗のような角質が肌を覆い尽くした。

「カタリナさん…？」

エレノアが戸惑うように声をかけてくるのが分かった。

スピノザはもう泣きそうな顔で、両手から閃光を撃ちまくった。カタリナは地面に膝をついたまま、片手でそれを全て払いのけた。そして顔を上げた。

その眼は千リーグ先まで見通すような金色に輝く眼に…竜の眼に変わっていた。叫んだ。

「スピノザあああ…！」

カタリナは駆け出した。スピノザが閃光を炸裂させたが無駄だった。10メートルの距離を一瞬で詰め、スピノザの頭を掴む。

「ひっ！」

スピノザは悲鳴と共に5メートル程先の倉庫の壁に叩き付けられた。同時に駆け寄ったカタリナに引き起こされ、両手の骨を握り潰される。うめき声を出す暇も無く、さらにカタリナはスピノザを殴り飛ばす。地面に伏したクランク達の真上をスピノザの体が旋回しながら舞った。そして地面をバウンドし、止まった。ずるずると地面を這いずり逃げようとしながら、声にならない呻き声を出しているスピノザに、カタリナはなおも駆け寄った。

「スピノザあ…！」

カタリナは止めを刺そうと拳を振り上げスピノザに駆け寄った。しかしその時。

「カタリナ！」

カタリナの腰に誰かの手が巻き付いた。

クランクだった。地面から上体だけ起こしてカタリナの体を押さえたのだ。

「止めるカタリナ！もういい！」

カタリナは一瞬足を止めた。しかしすぐに、クランクごと

引きずるようにスピノザに向けて駆け出した。

「止める！あんな奴殺してどうする！」

「止めるな！」

克蘭クの知っている声より余程重い声だったが、その声の主は泣きそうな声で叫んだ。

「あいつがジーノを殺したんだ！だから…私は…！」

カタリナはどす黒い怒りが自分を支配しているのを感じていた。しかし克蘭クはそのカタリナに諦めずに呼びかけ続けた。

「そんな事してあいつと同じになりたいのか！お前は薬屋だろ！」

カタリナの歩みが弱まった。さらに克蘭クは声を嚙らして叫んだ。

「俺に命くれた女が、人殺しちゃいけねーだろが！」

カタリナの歩みが、止まった。

握った拳を緩み、手が、だらりと下がった。カタリナは自分のその体から、狂暴な力が抜けていくのを感じた。顔を覆っていた鱗が、体を覆う鈍い光が、音もなく消えて行く。す、とカタリナが脱力したように地面にくずおれた。克蘭クが抱き抱えるように受けとめる。そしてその時にはもう、爪も牙も無いいつものカタリナに戻っていた。

「カタリナ！」

克蘭クはカタリナを抱え込むようにし、その顔を覗きこんだ。目は閉じられていたが、その頬には生気が感じられた。そして緩やかなため息が流れ出た。

ずっとカタリナを縛り付けていた何かが瓦解するような、そんな安らかな表情がカタリナの顔に広がった。

カタリナの全身は軋み、痛み、自分の体ではない様に力が入らなかった。しかし心は、いま静かで穏やかなものを感じていた。

「大丈夫」

カタリナはそう言って眼を開けた。そして続けた。

「ありがとう」

それを聞いた克蘭クの顔にも安堵の表情が広がりかけたその時、克蘭クの向こう、スピノザを殴り飛ばした方から音がした。

カタリナが頭を捻って見ると、スピノザがぐしゃぐしゃになつた手をこちらに向けていた。引き千切れて、恐らくもう効果を為さないだろうグローブを手に、ぶるぶると震えながら。それでもまだ、禍禍しい光を称えた眼をこちらに

向けて立っていた。

「しぶとい野郎だ…！」

ベイスが血の滴る右腕を抱えて呟いた。スピノザはそんなベイスの声も届いていないように、焦点の定まらない眼でカタリナを睨んでいた。

カタリナはクランクの肩に手をかけて、力づくで自分の体を引き起こした。

「俺が一番になるんだ、俺が一番偉えんだ、組の誰より、街の誰より…こんな女に邪魔されてたまるか…」

スピノザはうわごとのように呟いていた。

カタリナはそんなスピノザを澄んだ眼で見ている。もはやそこには憎しみは浮かんていなかった。それはむしろ、憐れみの眼だった。

「スピノザ」

カタリナは静かに呟いた。

その時スピノザは手をカタリナに伸ばした。

「くたばれクソ女…！」

スピノザがカタリナに向けて手を伸ばしたその時だった。

スピノザの頭を閃光が貫いた。

「え…？」

スピノザは血が流れ出した頭を、何か食い止める様に押さえた。そして信じられないと言つように、その手に付いた血を見ると、やがて、ゆっくりと崩れ落ちた。

閃光の飛んできた方向を振り返った。

ギノがいた。ギノが左腕をスピノザの方に伸ばしているのが見えた。その手にはグローブが、クランクから剥ぎ取った閃光のグローブがはめられていた。

ギノは一言、「…ザマあ、見やがれ」と呟くと、がっくりと首が落ち、倒れた。

そして、今度こそ、ピクリとも動かなくなった。

「With」

もう四人とも、ぼろぼろだった。しかし敵ももういなかった。ようやく、夜にふさわしい静寂が戻ってきた。カタリナ特製の傷薬を服用し、傷がふさがるのを待った。魔法戦に恐れをなしたのか、通る人の姿はまるで見えなかった。

警察はいつも遅れて来る。

四人は、誰も通らない港の倉庫の軒下で、座って夜空を見上げていた。雨が止んで、晴れ渡った空には、丸い月が浮かんでいた。やがて、出し抜けに克蘭クが吹き出す声が聞こえた。それを聞いてカタリナも笑った。ベイスが、エレノアが笑い出した。四人は夜空を見て、意味も無く笑いあった。傷がゆっくりと癒えていくのを、カタリナは感じた。

そして笑い疲れて、傷も塞がった頃。ベイスが体を起こした。

「それじゃ、そろそろ…」

カタリナ達も体を起こした。

「ええ」

四人は立ちあがった。

「本当に、色々ありがとう。あなた達の事は生涯、絶対に忘れないわ」

エレノアが潤んだ目をカタリナ達に向けた。カタリナは照れくさそうに目を伏せた。

ベイスが無言で、克蘭クに手を差し出した。克蘭クはニツカリ笑ってその手を握り返した。そしてベイスはエレノアの方を振り返った。エレノアもベイスに歩み寄った。

そして二人、肩を寄せ合うようにして、お互いを支えあった。

そしてベイスは、手を振った。エレノアが少し寂しそうな声で「さよなら」と呟いた。カタリナは、穏やかな笑顔で返した。

そして二人は、船につながるタラップを一段一段、上がっていった。そして上り切るまで、カタリナ達を振り返りはしなかった。

「…終わつたなあ…」

やがて克蘭クが間の抜けた様な声を出した。カタリナはその声に表情を緩め、答えた。

「そうだな…それに」

息をついて、続けた。

「少し疲れた」

カタリナは昨日もこの台詞を言った事を思い出した。しかしその時とはまるで違う、気分の良さを感じていた。克蘭クはただその言葉に「そりゃそうだな」といつて笑い、そしてカタリナに手を伸ばした。

「ほれ」

カタリナはきょとんとして聞いた。

「なんだよ」

「なんだよじゃねーよ、肩貸してやるっつってんだよ」

「ええ？」

カタリナは大げさにのけぞった。

「疲れてんだろが。遠慮すんなって、へろへろじゃねーかよ。ほれ」

克蘭クは肩を押し寄せてきた。カタリナはしばらく知らない振りをしていたが、やがてふっと笑って、克蘭クの肩に手を回した。

克蘭クはふんと息をついて、言った。

「おし、ほんじゃ行くか」

そうして二人は肩を寄せ合うように歩き出した。

しばらく夜の街の谷間を歩いた。やがて克蘭クがカタリナに訊ねた。

「…あいつら、これからどうなるだろうな」

「あの二人なら大丈夫。きつとうまくやるさ」

「お前もそう思うか？」

カタリナの言葉に、克蘭クはそう言って笑った。そして聞いた。

「…お前もこの街を出て行きたくなっただか？」

克蘭クの問いに、カタリナは視線を落とし、何かを思い出すような眼をした。そして思った。

哀しい思い出も、忘れたい過去も、全てここにある。だけど、自分の中で大事にしていた想いも、全てここで育てられた。この街は私の故郷だから。

「…いや。いろいろあっても、ここは私の街だから。ここ以外じゃ生きられないと思う」

克蘭クはそう言うカタリナを見て、ふっと笑った。

「俺もそうさ。なんだかんだいってこの街、そこまで嫌いじゃねえんだよ」

その答えに、カタリナは静かに眼を伏せた。

「私も…そうかな。そうかもな」

その時、その建物の谷間に、光が差しこんできた。

「あ…」

二人は足を止めた。

「朝か…」

朝の光が二人を照らした。

暖かい光だった。どこか懐かしい光だった。

その時カタリナは、ジーノにようやく別れを告げる事が出来る気がした。

寂しくは無かった。ただ、温かい懐かしさだけが胸を満たした。

朝の光の中を二人で歩きながら、カタリナは思った。

克蘭クはこれから先も、私のジーノにはなれないだろう。ジーノの代わりなんてどこにもいない。

それでも、私は一人じゃない。

私は克蘭クに寄りかかる女にはならないだろう。克蘭クもそんな事は望まないだろう。だけど私と克蘭クは、肩を貸し合い、守り合う仲間にならきつとなれる。

カタリナは克蘭クの顔を見た。克蘭クは眩しそうに朝日を見ていた。克蘭クも、同じ事を考えていればいいと思った。

カタリナは、懐から煙草ケースを出した。そしてふと、手を止めた。習慣のようになった動作。命を削って、魔力を高める煙草。

カタリナはケースの中で並んでいる煙草を静かに眺め、そしてそれを、ぱらぱらと地面に捨てた。

克蘭クはそんなカタリナを不思議そうに見ていた。

「いらねえのか？」

克蘭クが聞いてきた。カタリナは、

「いいんだよ」

と言い、克蘭クの方を見て、

「…もう、必要ないんだ」

そう答え、そして、穏やかに笑った。

(了)

『LADY BE GOOD』(名前非公開) 著

sakka.org